

高等教育開発をリードする人材が
集い、学び、成長する場。

全国の高等教育機関の教育の質向上のための
「教職員能力開発拠点」活動報告書

令和5年度

[令和6年3月]

愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室

はじめに

愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室は、平成22年3月に文部科学大臣から教育関係共同利用拠点（拠点名：教職員能力開発拠点）として認定されました。第1期（平成22～26年度）、第2期（平成27～令和元年度）を通じて、高等教育の質を高める専門家の育成を目的としたFD/SD/IRプログラムの開発・提供に取り組みました。令和2年4月から第3期（令和2～6年度）に入り、次年度（令和6年度）は第3期の最終年度を迎えようとしています。第3期においては、個々の教職員に対する支援に留まらず、全国の大学のカリキュラム、制度、リーダーシップ等の改善に向けた支援、すなわち「組織開発支援」を重視した取組を行っています。

本年度（令和5年度）は、新型コロナウイルス感染症の5類移行を受け、多くの高等教育機関においても、コロナ禍以前の活気が戻ってきました。本拠点事業においても、研修内容や想定する受講者によって開催方法を柔軟に変えながら実施し、対面での研修も多く行いました。

重点事業に位置づけている「専門家・指導者の養成と支援」のための研修については、FDer養成講座とカリキュラム・コーディネーター養成講座を、東京で対面開催しました。愛媛県外での対面開催は実に4年ぶりでしたが、全国から多くの皆様に参加いただき、研修の受講者の満足度は100%となるなど、好評を得ることができました。また、IRer養成講座など、オンラインで実施した研修もあり、関心のある教職員が参加しやすい方法を選べる体制ができてきました。

また、本年度は新しい分野の研修も複数行いました。国際化コーディネーター養成講座や生成AIコーディネーター養成講座など、時代のニーズに合った新しい内容の研修を開発、実施しましたが、皆様の関心も高く、多数の参加希望をいただきました。次年度以降も引き続き実施する予定です。

さらに、FD・SDに関するオンデマンドコンテンツの作成にも取り組みました。これらは全国の高等教育機関において、気軽にご利用いただけるよう、一般に広く公開しています。

今後も、対面、同期型オンライン、非同期型オンラインのそれぞれの利点を組み合わせたプログラムを実施していく予定です。さらに、新しい分野の研修の開発も続け、時流に沿った事業を行うよう努力して参ります。引き続き、本拠点が、全国の大学のカリキュラムなどの組織的な改善に貢献できますようお願いを賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

令和6年3月

国立大学法人愛媛大学長 仁科弘重

令和5年度「教職員能力開発拠点」活動報告書

目次

1	愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室について	
	(1) 組織概要	1
	(2) スタッフ紹介	4
2	教職員能力開発拠点について	
	(1) 教職員能力開発拠点の認定について	5
	(2) 教職員能力開発拠点の実施体制について	5
	(3) 教職員能力開発拠点の事業計画について	6
3	令和5年度の事業報告	
	(1) 令和5年度事業の総括	8
	(2) 令和5年度活動実績	
	I. 専門家・指導者養成と支援	11
	II. FD／SDモデルの構築と普及	29
	III. FD／SD活動を行う大学間連携ネットワーク等との協働	58
参考資料		
	① 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室内規	62
	② 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室共同利用運営委員会内規	64
	③ 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室共同利用推進会議内規	65
	④ 共同利用運営委員会委員名簿及び共同利用推進会議委員名簿	66

1. 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室について

(1) 組織概要

ミッション

教育・学生支援機構長の指示のもと、愛媛大学の教育に関する諸課題について調査・研究を行うと共に、その成果を実際の教育活動に適用し、本学の教育改革を推進すること。

教育企画室の業務（内規第4条及び第10条） ※P. 62～63参照

1. 全学的な教育課題に係る調査・研究等に関すること。
2. 教育の質保証のための教職員の能力開発に関すること。
3. 授業評価及びシラバスに関すること。
4. 学生の学習支援及び能力開発に関すること。
5. 四国地区大学教職員能力開発ネットワーク事業に関すること。
6. 教職員能力開発拠点事業に関すること。
7. その他教育開発に係る調査、研究等に関すること。

※上記の成果を、他の高等教育機関等の利用に供することができる。

教育企画室各部門について

教育・学習支援部門

主に教職員の能力開発を通して教育活動及び学習活動の支援を行っている。教員の能力開発としては、授業の改善、カリキュラムの改善、組織の整備・改革という3つのレベルにおいて、ワークショップ、セミナー、授業コンサルテーション、教育コーディネーター研修会などを実施している。職員の能力開発としては、教育学生支援部教育企画課及び総務部人事課と教職協働で専門分野別及び階層別のSDのプログラムやサービスを提供している。

教育調査・分析部門

主に教育・学習の実態・成果に関する調査の企画・実施・分析を行っている。新入生や卒業予定者等へのアンケートの調査結果を分析することで全学的な教育改善及び情報公開を行っており、調査結果の報告は「IRレポート」にまとめ、学内関係者に届けている。また、調査結果から想定される課題、他大学も含めたIRに関わる取組などを「教育企画室ニュースレター」に掲載して情報発信をしている。

学生能力開発部門

主に学生の能力開発を知性と人間性の両側面から支援する教育プログラムの開発・実施に取り組んでいる。その代表的な取組が、学生のリーダーシップを高める「愛媛大学リーダーズ・スクール」である。また、スタディ・スキル講座等のプログラム開発、学生による調査・研究プロジェクト（プロジェクトE）の運営、大学院生の能力開発を目的としたTA研修、附属高校のキャリア教育支援等を実施している。

沿革

- 1993年度：旧教養部を改組して、大学教育研究実践センター（学内施設）が設置。
- 2001年度：大学教育総合センター（学内施設）となる。
- 2002年度：大学教育総合センター（省令施設）となる。
- 2004年度：教育・学生支援機構の設置に伴い、大学教育総合センターが廃止され、機構のセンターの1つとして、教育開発センター（共通教育部・教育開発部）が設置。
- 2005年度：スタディ・ヘルプ・デスク（SHD）を設置。
- 2006年度：教育コーディネーター制度の導入。
愛媛大学教育改革促進事業（愛大教育改革GP）創設。
- 2008年度：「戦略的大学連携支援事業」に、「『四国地区大学教職員能力開発ネットワーク』による大学の教育力向上（代表校：愛媛大学）」が採択。
※四国地区の国立大学と近隣公私立大学等の連携により「四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）」を形成。
- 2010年度：「教職員能力開発拠点」（認定の有効期間：平成22年4月1日～平成27年3月31日）として、文部科学大臣から教育関係共同利用拠点として認定。
「FDカレンダー」の発行開始（2017年度まで継続）。
- 2012年度：「愛媛大学学生として期待される能力～愛大学生コンピテンシー～」制定。
- 2014年度：愛媛大学独自のテニユア・トラック制度（現：テニユア教員育成制度）の導入。
- 2015年度：「教職員能力開発拠点」に再認定（認定の有効期間：平成27年4月1日～令和2年3月31日）。データから考える愛大授業改善発行開始。
- 2016年度：大学教育イノベーション日本（HEIJ）設立（同時に愛媛大学加盟、2019年から教育企画室教員が代表を務める）。
- 2017年度：教育企画室教員がシリーズ編者として、2021年までに「看護教育実践シリーズ」全5冊（医学書院）を刊行。
- 2018年度：「四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）」設立10周年。
- 2019年度：教育企画室教員がシリーズ編者として、2021年までに「大学SD講座」全4冊（玉川大学出版部）を刊行。

2020年度：「教職員能力開発拠点」に再々認定（認定の有効期間：令和2年4月1日～令和7年3月31日）。

2021年度：「大学教職員のための48冊」を刊行。

2022年度：教育企画室教員がシリーズ編者として、「シリーズ大学教育の質保証」全3冊（医学書院）を刊行開始。
「愛大トランスファラブルスキル」の制定。

2023年度：「愛媛大学学生として期待される能力～愛大学生コンピテンシー～」改訂。
「愛媛大学FD・SDチャンネル」Y o u t u b e / X (T w i t t e r) 開設。

(2) スタッフ紹介

教育企画室には、実践経験と研究業績を兼ね備えた、高等教育開発を専門とするスタッフが配属されている。

<教員 スタッフ>

氏 名	所 属・職 名	専 門
杉森 正敏 - SUGIMORI Masatoshi	副学長（教育） 教育・学生支援機構副機構長、 教育企画室長、教授	森林資源学
中井 俊樹 - NAKAI Toshiki	教育・学生支援機構機構長補佐、 教職員能力開発拠点代表者 教育企画室 教授	高等教育論、人材育成論 (SDC資格取得者)
仲道 雅輝 - NAKAMICHI Masaki	教育企画室副室長、准教授	インストラクショナルデザイン、 教育工学、FD、e-learning (SDC資格取得者)
村田 晋也 - MURATA Shinya	教育企画室 講師	組織論(FD)、リーダーシップ論、 人的資源管理論
上月 翔太 - KOZUKI Shota	教育企画室 講師	高等教育論、西洋古典文学
坂本 規孝 - SAKAMOTO Noritaka	教育企画室 特定研究員	高等教育論、SD (SDC資格取得者)
真鍋 亮 - MANABE Ryo	教育企画室 研究員	高等教育論、教育経済学
高橋 平徳 - TAKAHASHI Yoshinori	教職総合センター 准教授	経験学習論、生涯学習論、 人的資源管理論
丸山 智子 - MARUYAMA Tomoko	学生支援センター 准教授	プロジェクト・マネジメント、 リーダーシップ (SDC資格取得者)
阿部 光伸 - ABE Mitsunobu	学生支援センター 講師	産業教育論、人的資源管理 (SDC資格取得者)

<事務 スタッフ>

氏 名	所 属・職 名
高木 佳代子 - TAKAGI Kayoko	教育学生支援部 教育企画課長 (SDC資格取得者)

※教育学生支援部教育企画課において事務局業務を実施

2. 教職員能力開発拠点について

(1) 教職員能力開発拠点の認定について

教育関係共同利用拠点制度は、多様化する社会と学生のニーズに応えつつ質の高い教育を提供していくために、各大学の有する人的・物的資源の共同利用等を推進することで大学教育全体として多様かつ高度な教育を展開していく取組を国が支援することを目的として創設された制度である。

愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室は、これまで行ってきた教職員能力開発のための研修講師の派遣や独自に開発したFD研修プログラムの提供及び「四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）」における教職協働など幅広い取組実績が評価され、平成22年3月23日に文部科学大臣から教育関係共同利用拠点に認定された。本拠点のこれまでの実績と、他大学にも開かれ、かつ他大学からの参加者の成長・習熟を担保できる拠点として発展が期待できる点が高く評価されたことにより、平成26年7月に5年間の認定が継続され、令和元年8月にも同じく5年間の認定が継続された。他大学や諸学協会等との連携により、これまで提供してきたプログラムの充実やFD/S D/I R/カリキュラム開発の専門家・実践的指導者の育成を図り、全国の高等教育機関の組織的な向上を目指していく。

◎拠点名：教職員能力開発拠点

◎認定施設の種類：大学の教職員の組織的な研修等の実施機関

◎認定の有効期間：平成22年4月1日～平成27年3月31日（5年間）

平成27年4月1日～令和2年3月31日（5年間）

令和2年4月1日～令和7年3月31日（5年間）

◎代表者名：中井 俊樹（愛媛大学教育・学生支援機構機構長補佐、教育企画室 教授）

(2) 教職員能力開発拠点の実施体制について

教育企画室が所属する教育・学生支援機構は、愛媛大学の教育理念と目標に沿い、教育の充実及び学生の修学支援等の強化を図り、これらに伴う諸課題に対処し、迅速で効率的な意思決定を行うことを目的に設置された組織で、以下の業務を行っている。

（教育・学生支援機構の業務）

1. 学士課程及び大学院課程の教育の改善及び充実に関すること。
2. 共通教育の企画及び実施に関すること。
3. 学生の受入れ、修学支援、課外活動支援、就職支援等の企画及び実施に関すること。
4. その他、目的を達成するために必要な事項。

その中で、教育企画室は、教育・学生支援機構長（理事・副学長〔教育担当〕が兼任）の直属機関として、機構長の指示のもと、愛媛大学の教育に関する諸課題について調査、研究等を行うとともに、その成果を実際の教育活動に適用し、愛媛大学の教育改革を推進することを目的として設置されている。また、教職員能力開発拠点の再認定を受け、これまで提供してきたプログラムの充実や重点事業の推進を図り、全国の高等教育機関等の利用に供している。

教職員能力開発拠点は、教育学生支援部教育企画課及び総務部人事課と教職協働で教職員の能力開発や教育改革の取組を行っている。

また、教育企画室には、共同利用運営委員会及び共同利用推進会議を置いている。

共同利用運営委員会は、教職員能力開発拠点の運営に関する重要な事項を審議しており、教育企画室員等の学内関係者のほか、学外の学識経験者4名もメンバーになっている（P.64、66参照）。令和2年度以降の認定継続を受け、令和2年7月に同委員会において、「第3期教職員能力開発拠点の事業等に関する基本方針」を策定した。

共同利用推進会議は、共同利用運営委員会が定める基本方針に基づき、共同利用の事業等を実施するために必要な事項を審議しており、教職員能力開発拠点運営スタッフである教育企画課長や人事課長がメンバーに入っている。（P.65、66参照）

さらに、教職員能力開発拠点は、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）、日本高等教育開発協会（JAED）、大学教育イノベーション日本（HEIJ）や大学評価コンソーシアムなどの高等教育関係学協会、他の教育関係共同利用拠点等と各種プログラムで連携し、事業を行っている。

（3）教職員能力開発拠点の事業計画について

令和2年度以降の認定継続を受け、令和2年7月に「第3期教職員能力開発拠点の事業等に関する基本方針」が共同利用運営委員会において策定された。この基本方針に基づき、毎年、事業計画が立てられている。

第3期教職員能力開発拠点の事業等に関する基本方針

令和2年7月15日
共同利用運営委員会決定

1. 事業目的

本事業の目的は、全国の大学の教職員能力開発の質向上に寄与することにある。第3期（令和2年度～6年度）は、第1期～第2期（平成22年度～令和元年度）までの取組をさらに発展させ、研修プログラムの提供による個々の教職員の能力開発支援だけでなく、教育改善に関する専門家・指導者の養成や本拠点が開発したFD/SDモデルの提供などを通じ、全国の大学のカリキュラム、制度、リーダーシップ等の改善に向けた支援、すなわち「組織開発（OD: Organizational Development）」支援に取り組み、各組織における自律的な教育改善の促進を目指す。

2. 事業内容

教職員能力開発拠点（以下「拠点」という。）は、教職員能力開発に関する以下の事業を行う。

- ① 専門家・指導者養成と支援
 - ✓ FD/SD/IR/カリキュラム開発の専門家・実践的指導者の養成 等
- ② FD/SDモデルの構築と普及
 - ✓ 研修プログラムの開発・公開、情報発信、相談対応 等
- ③ 大学間連携ネットワークとの協働
 - ✓ 他拠点等との協働による研修会の実施 等

3. 実施体制

- ✓ 外部有識者が過半数の共同利用運営委員会を置き、開かれた運営を行う。
- ✓ 教育企画室（教員組織）と教育学生支援部教育企画課及び総務部人事課（事務組織）が連携・協働して事業を行う。

令和5年度教職員能力開発拠点事業計画

◇全体計画

教職員能力開発拠点（愛媛大学教育企画室）は、全国の教育関係共同利用拠点として、FD/SD/IR/カリキュラム開発の専門家・指導者の養成、本拠点が開発したFD/SDモデルの提供や個別相談も含めた長期的なサポート等、各組織の自立的な教育改善を支援するための以下の事業を行うほか、他拠点やコンソーシアム等との連携を強化し、大学間連携ネットワーク等への講師派遣・運営支援を積極的に行う。これらの取組を通して、当拠点第3期の5年間（令和2～6年度）で延べ250機関の組織開発（OD：Organizational Development）支援を行うことにより、全国の大学の教職員能力開発の質向上を牽引する。

◇事業内容

I 専門家・指導者養成と支援

第3期は、FD/SD/IR/カリキュラム開発の専門家・指導者の養成・支援に関する研修のうち、毎年2講座を実施することとしているが、令和5年度は、「ファカルティ・ディベロッパー養成講座」と「カリキュラム・コーディネーター養成講座」を芝浦工業大学と共同開催する。また、令和4年度に実施した「SDコーディネーター養成講座」と「IRer養成講座」の受講者に対して、フォローアップのアンケートや相談対応などを行う。

さらに、新規事業として、国際化戦略を企画・立案する大学教職員を対象に「大学教育国際化コーディネーター養成講座」を開催する。大学がもつ裁量や独自性を発揮し、国際的環境の中で魅力ある大学教育を実現していくために必要な知識やカリキュラム編成、学習支援の方法を学習する。

II FD/SDモデルの構築と普及

本拠点が開発したFD/SDモデルを活用した延べ10機関程度の組織開発支援を行う。具体的な組織開発支援のあり方として、①研修講師派遣、②オンデマンドFD/SDコンテンツの発信、③FD/SDに対する個別相談対応、といったものが挙げられる。

①については、1機関あたり複数回の研修実施または1回の研修とその前後におけるコンサルティングを含むものに力点を置き、他大学に対する継続的な組織開発支援を図る。②については、拠点ホームページ等でオンデマンドのFD/SD教材を公開し、他大学がFD/SD研修や教職員の自学自習教材として活用することにより、他大学の自立的な組織開発を支援することを意図している。③については、他大学のニーズに対応する形で個別相談や訪問対応等を行う。その際、相談や訪問対応から研修やコンサルティングのニーズを掘り起こす等により、今後の発展的な組織開発支援の可能性及び本拠点の第4期事業のあり方も検討していく。

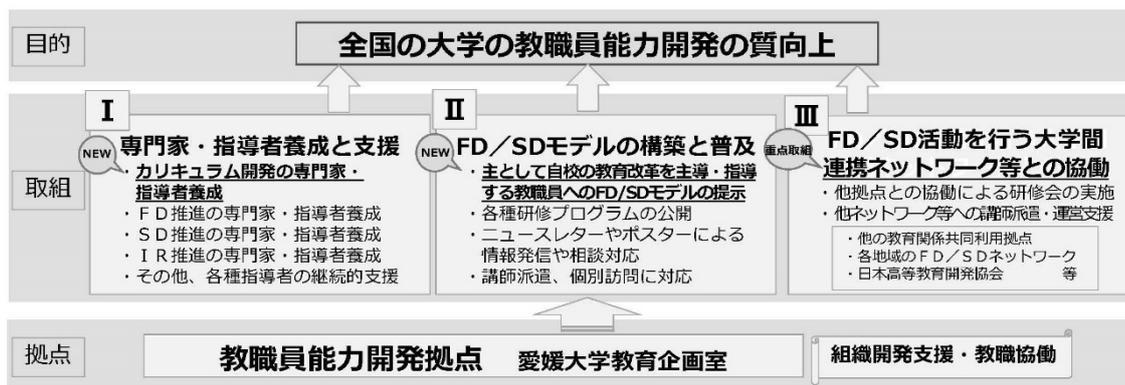
III FD/SD活動を行う大学間連携ネットワーク等との協働

令和5年度は、「ファカルティ・ディベロッパー養成講座」と「カリキュラム・コーディネーター養成講座」を芝浦工業大学教育イノベーション推進センター（理工学教育共同利用拠点）と共同開催するほか、「大学教育国際化コーディネーター養成講座」は大学教務実践研究会と連携して実施する。さらに、日本高等教育開発協会（JAED）等と新たな研修の共同開発を行うなどして、今後の組織開発支援のチャンネル拡大を図る。

3 令和5年度の事業報告

(1) 令和5年度事業の総括

愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室は、令和元年8月に教育関係共同利用拠点として3度目の認定を受け、令和2年4月に第3期の事業をスタートさせた。令和5年5月に新型コロナウイルス感染症が5類移行したことで、長らく続いたコロナ禍も終わりを見せ、社会全体がコロナ禍前の賑わいを取り戻しつつある1年であった。本拠点でも多くの研修を対面で行ったが、コロナ禍によりオンライン研修が普及したことで、対面研修への参加のハードルが上がり集客面で苦勞するなど、アフターコロナにおける研修実施の課題も見えてきた。以下、今年度の取組状況を総括する。



① FD/SD/IR/カリキュラム開発の専門家・指導者の養成・支援

今年度は、新規2講座を含む5講座を開催した。

ファカルティ・ディベロッパー養成講座とカリキュラム・コーディネーター養成講座を東京で同時開催し、全国からあわせて26名の参加があった。本拠点主催の研修では実に4年ぶりの対面開催であり、第3期事業では初となった。ファカルティ・ディベロッパーやカリキュラム・コーディネーターに求められる基礎的な知識等を学びつつ、FDの企画案やカリキュラムの課題解決案を作成するなど、具体的手法についても学んだ。また、対面で開催されたことにより、参加者同士の意見交換や講師との個別面談において、密なコミュニケーションを取ることができ、参加者からも高い満足度を得ることができた。一方で、IRer養成講座はオンラインで開催し、全国から17名の参加があった。参加者はIRの意義や方法の知識を学ぶとともに、IRの課題解決について検討を行い、実際に課題解決案を作成するワークに取り組んだ。

新規事業としては、大学教育国際化コーディネーター養成講座、大学職員のための生成AIコーディネーター養成講座を開催した。大学教育国際化コーディネーター養成講座は本学で開催し、全国から20名の参加があった。大学がもつ裁量や独自性を発揮し、国際的環境の中で魅力ある大学教育を実現していくために必要な知識やカリキュラム編成、学習支援の方法を学習するとともに、大学教育の国際化に向けた課題解決案を作成するワークを実施した。

また、近年発展のめざましいChat-GPTをはじめとした生成AIの利活用を組織的に推進する人材の育成のため、大学職員のための生成AIコーディネーター養成講座を本学で開催し、全国から27名の参加があった。生成AIに関する基本的知識や活用事例等を学ぶとともに、生成AIの組織的活用のアクションプランを作成した。さらに本講座のフォローアップとして、生成AI

技術を大学業務において活用できるようになるために、代表的なツールであるChat-GPTの基本的な操作を体験しながら学ぶ機会として、大学職員のためのChat-GPTハンズオンの会をオンラインで開催した。なお、ハンズオンの会は大学職員のための生成AIコーディネーター養成講座受講者だけでなく、定員の範囲で広く参加を募ったところ、全国から33名の参加があった。

② 研修プログラムの提供

教職員個々の能力開発から組織レベルの教育力向上まで、幅広く高等教育機関で活用できる知識やスキルを習得できるよう、全18プログラムを提供し、学内外から268名（令和6年3月10日現在）の参加があり、事後に行ったアンケートにおいても高い満足度を得ることができた。

また、FD・SDに関する幅広い分野のオンデマンド教材を開発した。これらの教材は今年度開設したYouTubeチャンネル（愛媛大学FD・SDチャンネル）に公開しており、無料で活用できるようにしている。

③ 研修講師派遣

多種多様な研修のニーズに対応できるメニューと体制を整え、今年度は28機関に対し、35件の講師派遣を行った（令和6年3月10日現在）。開催方法については、先方と相談の上、対面やオンラインで実施した。それぞれの利点を活かしたプログラム構成で、組織で必要とされる人材育成の取組等に、本拠点のノウハウを提供した。

④ 情報発信

学生の学びと成長に関わる各種データの収集・分析を公開した「データから考える愛大授業改善VOL.08」や、学内外のIRに関する取組を掲載した「IR News Vol.11」を作成し、愛媛大学の取組や研究成果を学内外に発信した。また、教育・学生支援機構が毎年刊行している「大学教育実践ジャーナル」については、高等教育の発展に資する研究論文や事例報告を掲載した第23号を発行した。

また、先述のとおりYouTubeチャンネル（愛媛大学FD・SDチャンネル）を開設し、教育企画室が関連する各種FD・SDに関する動画を配信している。さらに、研修や動画の広報に活用するため、X（Twitter）のアカウントを開設するなど、情報発信に力を入れている。

⑤ FD/SD活動を行う大学間連携ネットワーク等との協働

ファカルティ・ディベロッパー養成講座とカリキュラム・コーディネーター養成講座は芝浦工業大学教育イノベーション推進センター（理工学教育共同利用拠点）と、IRer養成講座は名古屋大学高等教育研究センター（質保証を担う中核教職員能力開発拠点）と、教務事務担当者講座（初級編）は高知大学と、それぞれ共催し、協働で取り組んだ。また、大学教育国際化コーディネーター養成講座は大学教務実践研究会と連携して開催した。その他、全国規模のネットワーク組織等に講師派遣を行うなど、大学教育の開発を進める組織等との連携を深めた。

【組織開発支援】

本拠点事業第3期は、全国の大学のカリキュラム、制度、リーダーシップ等の改善に向けた支援、すなわち「組織開発（OD: Organizational Development）」支援に取り組み、各組織における自律

的な教育改善の促進を目指すことを重点取組としている。今年度は、研修実施や講師派遣、コンサルティング等を通して、57機関への組織開発支援を実施した（令和6年3月10日現在）。

引き続き、それぞれの機関の実情や要望にあったプログラムによる研修やコンサルティングを実施するとともに、現状に即した新たなプログラムを開発し、全国の高等教育機関への支援を拡げていく。

(2) 令和5年度活動実績

I. 専門家・指導者養成と支援

各大学等において自立的にFD、SD及びIRを推進できる専門家・実践的指導者の養成は、特に高い波及効果が期待できるため、高等教育の質向上に大きく資することのできるニーズの高い事業の一つとなっている。本拠点では、第1～2期からFD/SD/IR推進の専門家・実践的指導者の養成に重点的に取り組み、これに加えて第3期からは新たにカリキュラム開発の専門家・指導者養成についても取り組んでいる。

今年度は、FD/IR/カリキュラム開発分野の3講座に加えて、大学教育国際化や生成AI分野の新規2講座を含む、全5講座を開催した。これらの講座では、知識や実践的なスキルを習得するだけでなく、グループワークなどを通して参加者同士で意見交換をする時間も多く取られている。多くは対面で開催したことで、「ホームページでは得られない他大学の組織内での活用事例を、参加者同士での交流を通して知ることができて良かった」「他大学の職員との横のつながりを得られた」といった声があがり、対面ならではの意見交換の場や参加者間での関係構築につながった。さらに受講者の行動変容や所属組織改善への取り組み等について、事後アンケートやフォローアップ等を通じた質的分析を行っている。

a. FD推進の専門家の養成・支援

2008年に大学設置基準が改正され、大学におけるFD（ファカルティ・ディベロップメント）が義務化されて以来、各大学では授業改善に向けた研修や研究に取り組まなければならなくなった。本拠点では、FDを企画、実施、運営することができる人材をファカルティ・ディベロッパー（FDe r）と呼び、FDe rに求められる基礎的な知識・技能・態度を育成することを目的として、「ファカルティ・ディベロッパー養成講座」を、平成23年度以降、隔年で開催している。

FDe r（ファカルティ・ディベロッパー：FD推進の専門家）とは

組織のFD責任者として各種研修プログラムの企画・実施や各教員への教育技術の支援を行う専門家のことを指し、以下3点を担うFD推進の専門家

- (1) 個々の教員や授業科目における教育技術の改善（ミクロ・レベル）
- (2) 学部や学科・コース等におけるカリキュラムの改善（ミドル・レベル）
- (3) 個々の大学やコンソーシアムでFDを推進するための組織整備（マクロ・レベル）

■ 9月20日（水）～22日（金）開催 ファカルティ・ディベロッパー養成講座

芝浦工業大学教育イノベーション推進センター（理工学教育共同利用拠点）と共催し、芝浦工業大学豊洲キャンパスを会場に、3日間に渡り対面開催した。高等教育機関で1年以上FDを担当している教職員を対象に募集



を行い、全国から7名（教員4名、職員3名）が参加した。

講座では、1日目にFDについての基礎知識を学び、2日目に実際にFDの企画案を作成するワークを行った。各グループに担当講師がつき、受講者は講師からのアドバイスを受けながら企画案を完成させ、3日目にグループ内で共有した。4年ぶりの対面開催になったことで、より相談しやすい環境となり、参加者同士のつながりにも良い効果をもたらした。

【事後アンケート結果】

- ①研修は全体的に満足できるものだった。 100%（そう思う+どちらかと言えばそう思う）
- ②知識やスキルを身につけることができた。 100%（そう思う+どちらかと言えばそう思う）

【参加者からの声】

- ・対面で実施されたことにより、FDに興味関心をもち、それぞれの自大学や日本の高等教育の改善を推進する志を持つ方々との密なコミュニケーションが取れ、今後にもつながっていくと感じました。
- ・所属大学に足りないことを理解できました。対面で話し合えたことが良かったです。
- ・アウトプットとそれに関するカウンセリングの時間がより良かったです。

b. カリキュラム開発の専門家（カリキュラム・コーディネーター：CC）の養成・支援

大学の質保証に向けた取組が求められる中、カリキュラムマネジメントの重要性はますます高まっている。カリキュラムは、大学の教育理念や教育目的にそって大学教職員が主体的に編成すべきものであるが、一方、カリキュラムマネジメントは専門的知識を要する活動であるため、カリキュラムマネジメントを担う人材の育成が大きな課題となっている。本拠点では、第3期からの新規事業として、カリキュラム開発の専門家を養成することを目的に、「カリキュラム・コーディネーター養成講座」を開講している。

CC（カリキュラム・コーディネーター：カリキュラム開発の専門家）とは

大学の教育理念を実現するために、計画・実施・評価・改善のサイクルを通して、カリキュラムの課題を解決することができる専門家

■ 9月20日（水）～22日（金）開催 カリキュラム・コーディネーター養成講座

芝浦工業大学教育イノベーション推進センター（理工学教育共同利用拠点）との共催で、ファカルティ・ディベロッパー養成講座と同時開催した。カリキュラムの編成や評価を担当している教職員を対象として募集を行い、19名（教員3名、職員16名）が参加した。

講座では、1日目にカリキュラムの編成・実施・評価・改善等について学んだあと、2



日目にカリキュラムの課題解決案を作成するワークを行い、3日目にグループ内で発表と意見交換を行った。

【事後アンケート結果】

- ①研修は全体的に満足できるものだった。 100% (そう思う+どちらかと言えばそう思う)
- ②知識やスキルを身につけることができた。 100% (そう思う+どちらかと言えばそう思う)

【参加者からの声】

- ・テキストや講義によって体系的な知識を得ることができました。講義の中で紹介される事例や他の参加者の事例を知ることで、理解や学びが深まりました。
- ・教務課に異動し、日常業務をこなしていましたが、カリキュラムの総論的なことについては理解が浅い状態でした。今回の研修を受講し、判断の根拠をきちんと示すことができるようになりました。
- ・「教学マネジメント」の背景から、カリキュラム編成、科目数の適正化と、コーディネーターになるにあたって知識としてインプットしておくべき内容を的確に説明して下さったのが良かった。

c. IR推進の専門家の養成・支援

IR（インスティテューショナル・リサーチ）は、計画立案、政策形成、意思決定を支援するための情報を提供する活動である。近年、各大学では大学のガバナンス機能の強化が求められており、本拠点ではIRを推進する専門家（IRer）を養成するための講座を開講している。

IRer（インスティテューショナル・リサーチャー：IR推進の専門家）とは
 教学に関わる様々なデータ（各種調査や教務データ等）に基づき、組織的に教育改革・改善を行うことができる専門家
 ※本拠点におけるIRとは、特に教育・学生支援に関するIR「教学IR」を指します。

■ 12月14日（木）～15日（金）開催 IR養成講座

名古屋大学高等教育研究センター（質保証を担う中核教職員能力開発拠点）との共催でオンライン（Zoom）開催した。

IRの経験が1年以上10年未満の教職員を対象に募集を行い、全国から17名（教員1名、職員16名）が参加した。

参加者は、IRerに必要なとされる実践的な知識や質的データの分析方法等の具体的なスキルを学



び、その後、学んだ知識をもとに自大学における課題解決案の作成を行った。Zoomの個別ブレイクアウトルームで作成に取り組み、担当講師が各ルームを回る方法で個別面談も行った。また、作成後にグループ内での共有や意見交換をすることで理解を深めた。

【事後アンケート結果】

- ①研修は全体的に満足できるものだった。 100% (そう思う+どちらかと言えばそう思う)
- ②知識やスキルを身につけることができた。 100% (そう思う+どちらかと言えばそう思う)

【参加者からの声】

- ・ 具体的なデータを使うことで説得力が高まり、若い職員でも組織を動かすことができるというお話に嬉しくなりました。
- ・ IRについて俯瞰して知ることができました。また、温度感や距離感、既存部署等々の付き合い方など、本ではあまり知ることができない部分も直接伺うことができて参考になりました。他の参加者とのグループワークの機会を多くとっていただけたのもよかったです。
- ・ IRに関する基本的な知識だけでなく、他大学のIRの取り組みや状況を知ることができたことは、とても有益でした。

d. 今年度開催した新規講座

今年度は、大学教育国際化及び生成AI活用といった、今の時代に即した2分野の講座を実施した。

令和5年度に実施した新規講座

- ① 5月19日（金）～20日（土）『大学教育国際化コーディネーター養成講座』
- ② 12月6日（水）～7日（木）『大学職員のための生成AIコーディネーター養成講座』

■① 5月19日（金）～20日（土）開催 大学教育国際化コーディネーター養成講座

本講座は、大学がもつ裁量や独自性を発揮し、国際的環境の中で魅力ある大学教育を実現していくために必要な知識やカリキュラム編成、学習支援の方法を学習することを目的に実施した。国際化戦略を企画・立案する大学教職員を対象に募集を行い、20名（教員4名、職員16名）が参加した。

講座では、大学教育の国際化についての課題や、大学組織における教務、留学生への支援について知識を習得し、最後に各グループで課題解決に関するワークを行った。大学教育の国際化において悩みを抱えている参加者もあり、各グループの担当教員の助言により



解決している姿もみられた。

【事後アンケート結果】

- ①研修は全体的に満足できるものだった。 100% (そう思う+どちらかと言えばそう思う)
②知識やスキルを身につけることができた。 100% (そう思う+どちらかと言えばそう思う)

【参加者からの声】

- ・国際化を多方面から改めて考えるきっかけとなった。派遣受入だけでなく組織のことなどを知れて、非常に参考になりました。
- ・大学教育国際化の現状については実務でもわかる部分が多いのですが、影響している制度や過去の経緯を教えていただいた点と、今後改善に必要なマネジメントに関する示唆をいただいた点が良かったです。
- ・国際業務担当者として、教務の業務内容に理解を深めたいと考える一方でハードルの高さも感じていますが、まずは学内で国際関係業務について理解を深めることができるような取り組みをしてみようと思います。

■② 12月6日(水)～7日(木)開催 大学職員のための生成AIコーディネーター養成講座

本講座は、生成AIの利活用を組織的に促進する人材を生成AIコーディネーターとし、そのために求められる知識や態度について学習することを目的としている。今回は、組織のDX化を推進する大学職員や業務におけるAI活用に関心のある大学職員を対象に募集を行ったところ、全国から27名が参加した。

講座では、1日目に生成AIに関する基本的知識や大学組織における活用事例等について学び、2日目にグループに分かれて自身のアクションプランを設計し発表した。

なお、本講座のフォローアップとして、令和6年2月17日(土)に「大学職員のためのChat-GPTハンズオンの会」をオンライン(Zoom)開催した。「大学職員のための生成AIコーディネーター養成講座」受講者だけでなく、Chat-GPTの使い方など初歩的な知識を学びたい大学職員を対象に募集を行い、33名が参加した。講座では、生成AI技術を大学業務において活用できるようになるため、代表的なツールであるChat-GPTの基本的な操作を体験しながら学び、理解を深めていった。



【事後アンケート結果】

- ①研修は全体的に満足できるものだった。 96.3% (そう思う+どちらかと言えばそう思う)
②知識やスキルを身につけることができた。 92.6% (そう思う+どちらかと言えばそう思う)

【参加者からの声】

- ・ 生成A I を自学でどのように活用し広めていくか、全く手探りだったため、研修全般を通して実行すべきことの解像度が上がりました。
- ・ 組織としてはまだ生成A I の導入について動きがない中研修を受け、使える個人は重要ですが、使う目的、使える仲間、使える環境を整備することが大切であると学びました。
- ・ 他大学がどの程度生成A I を利用しているか、どんなツールを使用しているかを知れたことが良かったです。まだまだ個人レベルでも活用しきれていないので、今回知った活用方法を取り入れてみようと思いました。

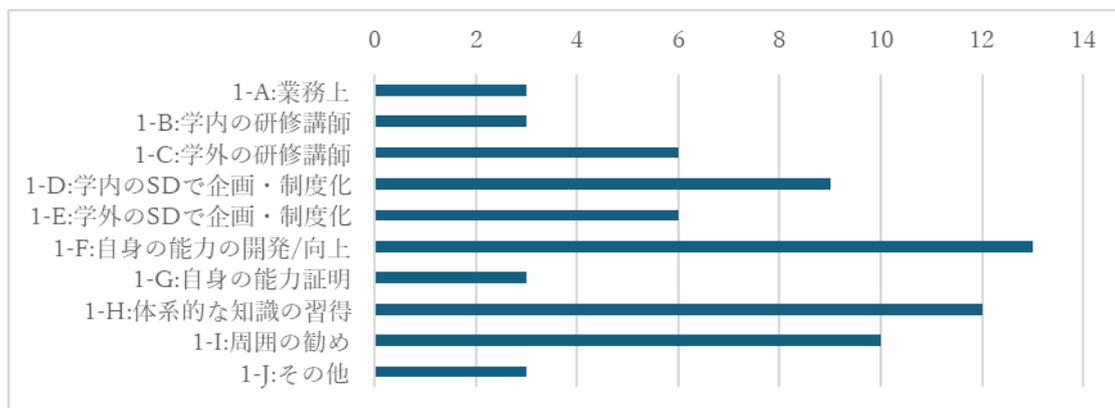
e. SDCアンケート調査

本拠点では、職員の能力開発に関する知識・技術を修得し、特定の認定基準を満たしたSDの実践的指導者のことを「SDコーディネーター（SDC）」と称している。今年度は今後の事業展開の参考とするために、SDCの実態を把握すべくアンケート調査を実施した。アンケートは令和5年11月末までにSDCに認定された者のうち、退職者等を除く25名を対象としたところ、24名から回答があり、ほぼ全ての対象者から回答を得ることができた。アンケート結果については、次ページ以降のとおりである。

なお、本拠点がこれまでに認定したSDCは42名に上り（令和5年度末）、ネットワークとして機能しうる人数が揃っている。今後は、SDC同士の交流を通して個別または共同でのSD活動を促せるようなネットワークの構築を検討するとともに、広報活動等も行い、SDCの認知度向上を図っていく。

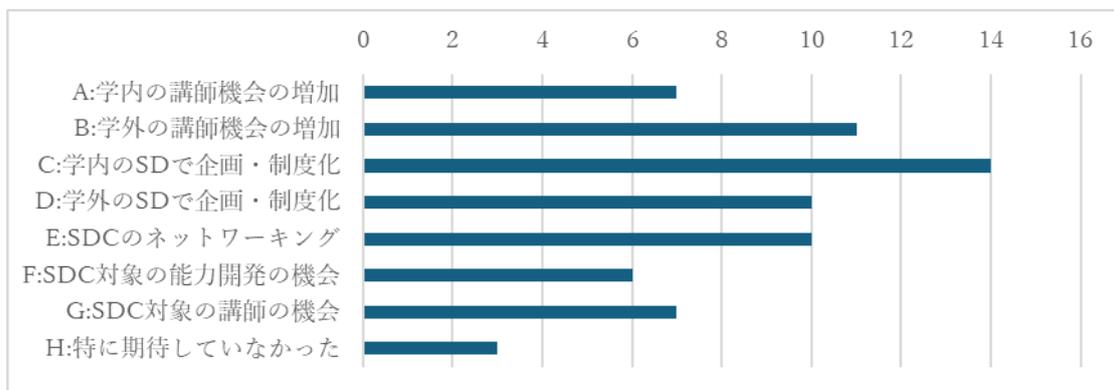
【アンケート結果】

- ・ SDCに申請した動機については、「自身の能力を開発／向上したかった」、「SD活動に必要な知識を体系的に習得したかった」との回答が多く、主体的に申請している実態が明らかになった。（図1）



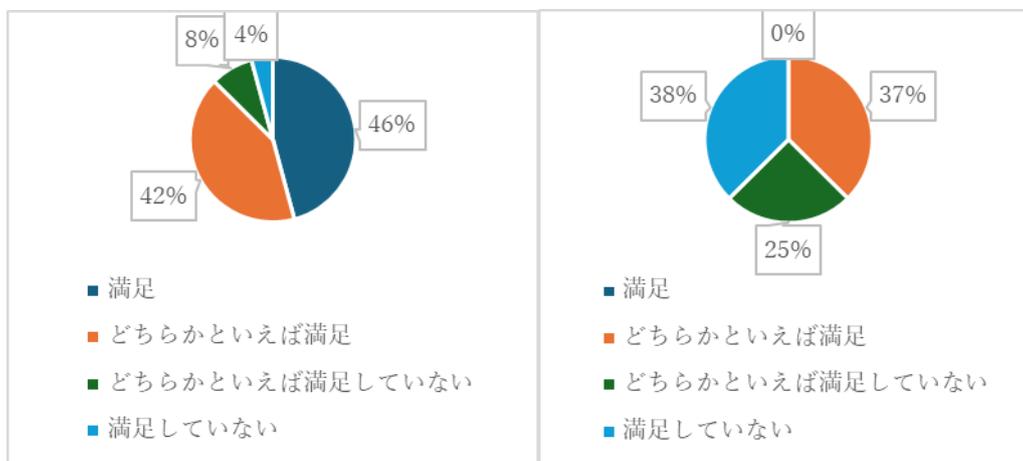
（図1：SDCに申請した動機（複数回答可））

- ・SDCに申請したときに期待していた効果やメリットとしては、「学内のSD活動の企画・制度化に携わること」（14件）、「学外のSD活動で講師を務める機会が増えること」（11件）とする回答が順に多く、SD活動をコーディネートするというSDC本来の役割が十分に理解され受け入れられていることが分かった。



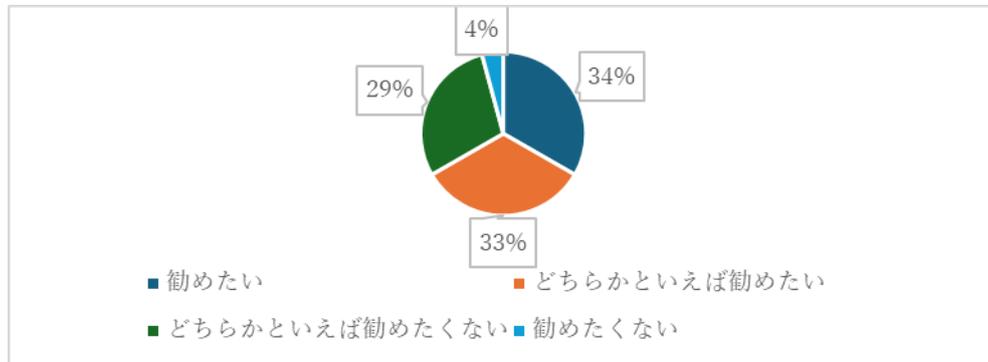
(図2：申請時に期待したSDCの効果・メリット)

- ・SDCに関連して本拠点が行っている研修やサポートの満足度については、「満足」「どちらかといえば満足している」と答えた割合を認定前と認定後で比較したところ、認定前は88%（図3）と高いものの、認定後は37%（図4）と比較的低い結果となった。



(図3：認定前の研修・サポートの満足度) (図4：認定後の研修サポートの満足度)

- ・SDCになることを他の人に勧めたいかという質問については、67%が「勧めたい」「どちらかといえば勧めたい」と回答した。回答理由の自由記述を見ると、「SDCの知識や技能はSDだけでなく、業務遂行や部下育成といった日常的な対応にも活かせる」「SDC仲間を増やしてさらに力量を高めたい」等の肯定的な意見がある一方で、「SDCの認知度が低い」「SDCになってからの活動を具体的に想定しにくい」といった否定的な意見もあった。



(図5：SDCになることを他の人に勧めたいか)

- ・今後SDCとして活動するに当たって本拠点に期待することとしては、講師を務めたりSDプログラムを構築したりといった具体的な活動の場を求める回答のほか、他大学の事例を知ったり情報や意見を交換したりできるようにSDC同士をネットワーク化して欲しいとの要望や、SDCの個別の活動を後押しするため認知度の向上といった声が寄せられた。

ファカルティ・ディベロッパー (FDer) 養成講座

先着30名

日程: 令和5年9月20日(水)～22日(金)

会場: 芝浦工業大学豊洲キャンパス(対面開講)

対象: 高等教育機関で1年以上FDを担当している教職員

※所属機関でのFD活動事例を使ったワークがあるため、FD業務の経験のない方
及び民間企業等に勤務されている方の参加はお断りしております。

※3日間全プログラムに参加できる教職員の方に限ります。

お申し込み

参加費: 4,000円

7月3日(月)正午 ～ 7月24日(月)正午

- ◆ グループワークのため、班分け名簿を作成します。名簿には、氏名・学校名・所属・職種・職名のみ記載します。
- ◆ 定員人数(30名)に到達次第、募集を締め切ります。お早めにお申し込みください。受付完了後、確認メールを送信します。いただいた情報は、本講座以外に使用することはありません。
- ◆ 多くの機関の方々にご参加いただくため、同一機関からのお申し込みが多数の場合は、全体のお申し込み状況により受講を制限させていただくことがあります。
- ◆ 研修の効果を確認するため、事後アンケートにご協力をお願いいたします。
- ◆ 全プログラムの受講者には修了証をお渡しします。

お申し込みはWebから <https://web.opar.ehime-u.ac.jp>



実施目的

FDを企画・実施する立場にあるファカルティ・ディベロッパーに求められる基礎的な知識・技能・態度を育成する。

到達目標

1. 所属する機関において、なぜFDが必要なのかを説得力をもって説明できる。
2. 所属する機関のFD活動を振り返り、特徴と課題を抽出することができる。
3. FDのさまざまな場面で求められる課題解決の方法を提案することができる。
4. FDに関する多様な考え方や実践事例を尊重し、共に学びあう雰囲気に貢献する。

講師

- 仲道 雅輝 (愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室)
村田 晋也 (愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室)
榊原 暢久 (芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター)
恒安 眞佐 (芝浦工業大学 建築学部)
鈴木 洋 (芝浦工業大学 情報システム部)

スケジュール

9月20日(水)

- 12:30 受付開始
13:00 オリエンテーション 【村田】
13:30 所属大学のFD活動の振り返り 【仲道】
14:25 FDを理解する 【榊原】
15:20 FDを設計する 【仲道】
16:00 研修を運営する 【鈴木】
16:45 授業コンサルティングを運営する 【村田】
17:30 ※情報交換会(名刺交換等)
18:00 終了

9月21日(木)

- 9:30 学生参画型FDを運営する 【恒安】
10:20 ティーチングポートフォリオを取り入れる 【榊原】
11:00 ファカルティ・ディベロッパーとして成長する 【榊原】
13:00 演習:FDの企画案を作成する 個別コンサル 【仲道・榊原】
17:00 終了

9月22日(金)

- 9:30 演習:FDの企画案の発表と共有 【仲道・榊原】
11:30 まとめと振り返り 【仲道・榊原】
12:00 クロージング 【村田】
12:30 終了

お問い合わせ

愛媛大学教育学生支援部教育企画課
TEL:089-927-9154
mail:kioiku@stu.ehime-u.ac.jp

主催 / 教職員能力開発拠点
(愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室)

<https://web.opar.ehime-u.ac.jp>

共催 / 理工学教育共同利用拠点
(芝浦工業大学教育イノベーション推進センター)

<http://edudvp.shibaura-it.ac.jp>

後援 / 日本高等教育開発協会

事前課題

1. 自大学で実施しているFDを紹介する資料(受講者間で共有可能なもの)をPDFデータ(A4用紙1枚程度)で提出してください。
*以下の①~③の内容を含めてください。
①FDの概要 ②FDの特徴 ③FDの課題
*資料の右上に大学名及び氏名をご記入ください。
▶提出期限:9月6日(水)
▶提出先:愛媛大学 教育学生支援部 教育企画課
kioiku@stu.ehime-u.ac.jp
※提出いただいた資料は参加者に配付し共有します。

アクセス

- 芝浦工業大学豊洲キャンパス
(東京都江東区豊洲3-7-5)
◆電車・地下鉄
・東京メトロ有楽町線「豊洲駅」1c、または3番出口から徒歩7分
・ゆりかもめ「豊洲駅」から徒歩9分
・JR京葉線「越中島駅」2番出口から徒歩15分
◆主要駅からの都営バス
・JR新橋駅銀座口 6番のりば「業10または業10出入系統」乗車 約20分。IHI前から徒歩2分
・東京駅八重洲口10番のりば「東16系統」乗車約18分。IHI前から徒歩2分
<https://www.shibaura-it.ac.jp/access/toyosu.html>



カリキュラム・コーディネーター 養成講座

先着30名

日程: 令和5年9月20日(水)～22日(金)

会場: 芝浦工業大学豊洲キャンパス(対面開講)

対象: カリキュラムの編成や評価を担当している教職員

※所属機関でのカリキュラムに関わるワークがあるため、カリキュラム関連業務の経験のない方及び民間企業等に勤務されている方の参加はお断りしております。
※3日間全プログラムに参加できる教職員の方に限ります。

お申し込み

参加費: 4,000円

7月3日(月)正午 ～ 7月24日(月)正午

- ◆ グループワークのため、班分け名簿を作成します。名簿には、氏名・学校名・所属・職種・職名のみ記載します。
- ◆ 定員人数(30名)に到達次第、募集を締め切ります。お早めにお申し込みください。受付完了後、確認メールを送信します。いただいた情報は、本講座以外に使用することはありません。
- ◆ 多くの機関の方々にご参加いただくため、同一機関からのお申し込みが多数の場合は、全体のお申し込み状況により受講を制限させていただくことがあります。
- ◆ 研修の効果を確認するため、事後アンケートにご協力をお願いいたします。
- ◆ 全プログラムの受講者には修了証をお渡しします。

お申し込みはWebから <https://web.opar.ehime-u.ac.jp>



実施目的

カリキュラムの編成・実施・評価・改善に関わるカリキュラム・コーディネーターに求められる基礎的な知識・技能・態度を育成する。

到達目標

1. 所属組織において、なぜカリキュラムの改善が必要なのかを説得力をもって説明できる。
2. 大学のカリキュラムの特徴と編成の方法を説明することができる。
3. 学習成果の評価における方法と留意点を説明することができる。
4. 所属組織のカリキュラムの特徴と課題を抽出することができる。
5. カリキュラムに関するさまざまな課題解決の方法を提案することができる。
6. 大学のカリキュラムに関する多様な考え方や実践事例を尊重し、共に学びあう雰囲気にも貢献する。

講師

中井 俊樹 (愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室)
上月 翔太 (愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室)
坂本 規孝 (愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室)
竹中 喜一 (近畿大学IR・教育支援センター)

スケジュール

9月20日(水)

12:30 受付開始	
13:00 オリエンテーション	【上月】
13:20 教学マネジメントの背景と意義	【中井】
14:20 自大学のカリキュラムの特徴と課題	【坂本】
15:10 DPの見直しと修正	【上月】
16:10 カリキュラムの編成と実施	【坂本】
17:10 授業科目数の適正化	【上月】
18:00 終了	

9月21日(木)

9:30 学習成果の評価	【竹中】
11:10 教学マネジメントの組織体制	【中井】
13:00 課題解決案の立案において	【上月】
13:30 個人ワーク、相談	
16:00 グループ内中間発表	
16:40 個人ワーク続き	
17:30 終了	

9月22日(金)

9:30 課題解決案の発表とディスカッション	
11:40 まとめと振り返り	【上月】
12:00 クロージング	【上月】
12:30 終了	

お問い合わせ

愛媛大学教育学生支援部教育企画課
TEL:089-927-9154
mail:kiyoiku@stu.ehime-u.ac.jp

主催 / 職員能力開発拠点
(愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室)
<https://web.opar.ehime-u.ac.jp>

共催 / 理工学教育共同利用拠点
(芝浦工業大学教育イノベーション推進センター)
<http://edudvp.shibaura-it.ac.jp>

後援 / 日本高等教育開発協会

事前課題

1. テキスト『カリキュラムの編成』の第1章から第3章を読んできてください。
2. テキストの内容を踏まえながら、ワークシートを使って、所属組織のカリキュラムをそれぞれの構成要素別に適切に設計されているのかどうかを5点満点で評価してください。4点以下の場合は具体的な改善点を記してください。
3. このワークシートに記載した内容にもとづいて、当日にグループ内で報告できるようにしておいてください。
4. テキストの指定の章以外も、講座の中で扱うテーマもあるため、事前に目を通しておくことを推奨します。

*テキストは各自でご用意ください。

中井俊樹編著『カリキュラムの編成』
(玉川大学出版部)

▶提出期限:9月6日(水)

▶提出先: 愛媛大学 教育学生支援部
教育企画課

kiyoiku@stu.ehime-u.ac.jp

※受付完了後、ワークシートをお送りします。

※提出いただいた資料は参加者に配付し共有します。

アクセス

芝浦工業大学豊洲キャンパス
(東京都江東区豊洲3-7-5)

◆電車・地下鉄

・東京メトロ有楽町線「豊洲駅」1c、
または3番出口から徒歩7分

・ゆりかもめ「豊洲駅」から徒歩9分

・JR京葉線「越中島駅」2番出口から徒歩15分

◆主要駅からの都営バス

・JR新橋駅銀座口 6番のりば「業10または業10出入系統」乗車 約20分。IHI前から徒歩2分

・東京駅八重洲口10番のりば「東16系統」乗車約18分。IHI前から徒歩2分

<https://www.shibaura-it.ac.jp/access/toyosu.html>



IRer養成講座



日程: 令和5年12月14日(木)～15日(金)

先着20名

会場: ZOOM (オンライン開催)

対象: IRを担当している教職員 (IRの経験が1年以上10年未満の方)

※民間企業等に勤務されている方の参加はお断りしております。

※2日間全プログラムの参加が可能で、インターネット接続や参加者同士の対話に支障のない環境で参加できる教職員の方に限ります。

お申し込み

★参加費: 4,000円

※主催校、共催校の所属教職員は無料

10月2日(月)正午～11月15日(水)正午

- ◆ グループワークのため、班分け名簿を作成します。名簿には、氏名・学校名・所属・職種・職名のみ記載します。
- ◆ 定員人数(20名)に到達次第、募集を締め切ります。お早めにお申し込みください。受付完了後、確認メールを送信します。いただいた情報は、本講座以外に使用することはありません。
- ◆ 多くの機関の方々にご参加いただくため、同一機関からのお申し込みが多数の場合は、全体のお申し込み状況により受講を制限させていただくことがあります。
- ◆ 参加費の支払い方法について
研修終了後、申し込み時にフォームへ記載いただいた「振込用紙送付先」へ振込用紙をお送りします。届きましたら、期限までにお支払ください。
なお、お申し込み後にキャンセルされた場合も参加費は請求させていただきます。
- ◆ 研修の効果を確認するため、事後アンケートにご協力をお願いいたします。
- ◆ 全プログラムの受講者には修了証をお渡しします。

お申し込みはWebから <https://web.opar.ehime-u.ac.jp>



実施目的

IRの担当者として、IRの意義や方法、データ分析や報告に関する実践的な知識とともに、所属大学におけるIRを改善するための具体的手法を身につけることを目的としています。

到達目標

1. IRの意義と方法について説明できる
2. 学習成果を評価するための方針について説明できる
3. 学生にかかわるデータを分析し報告するための方法を説明できる
4. 所属大学におけるIRの改善提案ができる
5. 多様な考えや経験を尊重し、共に学び合う雰囲気をつくることのできる

講師

- 中井俊樹（愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室）
上月翔太（愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室）
坂本規孝（愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室）
竹中喜一（近畿大学 IR・教育支援センター）
丸山和昭（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）

スケジュール

12月14日(木)

- 9:30 受付・接続確認
10:00 開会挨拶
10:05 アイスブレイク・オリエンテーション 【坂本】
10:20 IRの意義と方法を理解する 【中井】
11:20 IRの課題を共有する(10分/人) 【坂本】
12:10 休憩
13:10 学生の学習過程を分析する 【上月】
14:10 学生調査を企画・実施する 【丸山】
15:10 統計分析を実施する 【丸山】
16:10 テキストデータを活用する 【上月】
17:00 質疑応答・諸連絡 【坂本】
17:20 終了

12月15日(金)

- 10:00 前日の振り返り 【坂本】
10:10 活用につながる報告を行う 【坂本】
11:10 IRの組織体制を構築する 【竹中】
12:00 休憩
13:00 IRの課題解決を検討する 【全講師】
グループに分かれて
IRの課題解決案の作成・発表・質疑応答
17:00 まとめとふりかえり 【坂本】
17:20 閉会挨拶・クロージング
17:30 終了

事前課題

所属大学におけるIRの取組と、
解決したいと考えるIRの課題に
関するワークシート

- * 受付完了後、
ワークシートの様式をお送りします。
- * 資料の1枚目右上に、
大学名及び氏名をご記入ください。

- 提出期限:令和5年12月4日(月)
- 提出先:愛媛大学 教育学生支援部
教育企画課
kiyoiku@stu.ehime-u.ac.jp

- * 提出いただいた資料は
参加者に配付し共有します。

お問い合わせ

愛媛大学教育学生支援部教育企画課
TEL:089-927-9154
mail:kiyoiku@stu.ehime-u.ac.jp

- 主 催 / 教職員能力開発拠点
(愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室)
<https://web.opar.ehime-u.ac.jp>
共 催 / 質保証を担う中核教職員能力開発拠点
(名古屋大学高等教育研究センター)
<https://web.cshe.nagoya-u.ac.jp>

大学教育国際化 コーディネーター養成講座

会場：愛媛大学城北キャンパス(対面開講)

令和5年5月19日(金)～20日(土)

対象：大学教育の国際化を推進する役割を担う教職員
大学教育の国際化に関心をもつ教職員

※民間企業等に勤務されている方の参加はお断りしております。

※2日間全プログラムに参加できる教職員の方に限ります。

☆参加費無料



お申し込み

4月5日(水)正午～4月21日(金)正午

- ◆定員人数(30名)に到達次第、募集を締め切ります。お早めにお申し込みください。受付完了後、確認メールを送信します。いただいた情報は、本講座以外に使用することはありません。
- ◆グループワークのため、班分け名簿を作成します。名簿には、氏名・学校名・所属・職種・職名のみ記載します。
- ◆多くの機関の方々にご参加いただくため、同一機関からのお申し込みが多数の場合は、全体のお申し込み状況により受講を制限させていただくことがあります。
- ◆研修の効果を確認するため、事後アンケートにご協力をお願いいたします。
- ◆全プログラムの受講者には修了証をお渡しします。

お申し込みはWebから <https://web.opar.ehime-u.ac.jp>



実施目的/

大学がもつ裁量や独自性を発揮し、国際的環境の中で魅力ある大学教育を実現していくために必要な知識やカリキュラム編成、学習支援の方法を学習することを目的としています。

到達目標 /

1. 大学教育の国際化が求められる意義と背景を説明できる
2. 学生の海外への送り出しにかかわる留意点やプログラム設計、学生支援の方法を説明できる
3. 留学生を受け入れる際の留意点やプログラム設計、学生支援の方法を説明できる
4. 大学教育の国際化に向けた自大学の組織的課題と改善策を示すことができる
5. 大学教育の国際化に関する多様な考え方や経験を尊重し、共に学び合う雰囲気をつくること
ができる

講師

- 中井俊樹 (愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室)
上月翔太 (愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室)
大津正知 (茨城大学 情報戦略機構)
岩田剛 (愛媛大学 国際連携支援部国際連携課)
大枝さやか (国際基督教大学 教務グループ)
大竹秀和 (立教大学 国際化推進機構)
宮林常崇 (東京都公立大学法人 東京都立産業技術大学院大学管理部)
村上健一郎 (横浜国立大学 理工学系事務部)

スケジュール

5月19日(金)

- 9:00 受付開始
9:30 オリエンテーション・アイスブレイク
10:00 大学教育の国際化とその課題 【中井】
11:00 日本の大学における国際化と大学組織 【大津】
11:50 休憩
13:00 国際化に対応する教務 【宮林】
14:00 海外派遣プログラムの設計 【大枝】
15:00 海外留学の支援 【大竹】
16:00 留学生にかかわる制度 【岩田】
17:00 留学生の募集と受入れ 【村上】
17:50 質疑応答
18:00 終了

5月20日(土)

- 9:00 前日の振り返り
9:10 留学生への支援 【上月】
10:10 国際化を支える組織と人材 【宮林】
11:00 大学教育の国際化に向けた課題解決を検討する
(うち1時間休憩)
14:30 全体共有とふりかえり
14:50 クロージング
15:00 終了

お問い合わせ

愛媛大学教育学生支援部教育企画課
TEL:089-927-9154
mail:kioyiku@stu.ehime-u.ac.jp

事前課題

自大学の教育における国際化の取組の特徴と課題に関するワークシートの作成

▶提出期限:5月12日(金)

▶提出先:

kioyiku@stu.ehime-u.ac.jp

※受付完了後、ワークシートをお送りします。

※提出いただいた資料は参加者に配付し共有します。

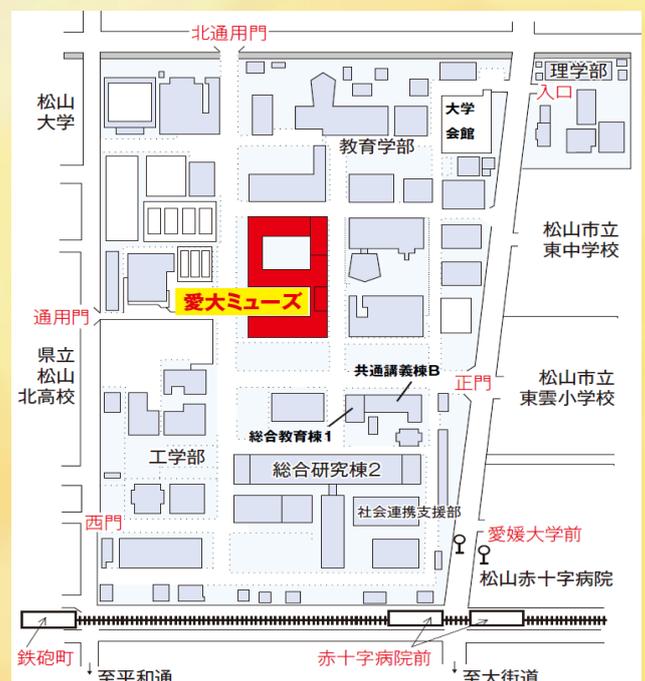
アクセス

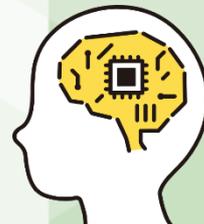
愛媛大学城北キャンパス

愛大ミュージム1階(愛媛県松山市文京町3番)

松山駅から:路面電車(伊予鉄道市内電車)

環状線①(古町方面行き)「赤十字病院前」下車





大学職員のための 生成AIコーディネーター養成講座

日程:令和5年12月6日(水)~7日(木)

先着30名

会場:愛媛大学 城北キャンパス(対面開催)

対象:所属大学や所属部署など組織のDX化を推進する大学職員

※ 民間企業等に勤務されている方の参加はお断りしております。

※ 2日間全プログラムに参加できる方に限ります。

お申し込み

★参加費:無料

10月16日(月)正午 ~ 10月31日(火)正午

- ◆ グループワークのため、班分け名簿を作成します。名簿には、氏名・学校名・職名のみ記載します。
- ◆ 定員人数(30名)に到達次第、募集を締め切ります。お早めにお申し込みください。受付完了後、確認メールを送信します。いただいた情報は、本講座以外に使用することはありません。
- ◆ 多くの機関の方々にご参加いただくため、同一機関からのお申し込みが多数の場合は、全体のお申し込み状況により受講を制限させていただくことがあります。
- ◆ 研修の効果を確認するため、事後アンケートにご協力をお願いいたします。
- ◆ 全プログラムの受講者には修了証をお渡しします。

お申し込みはWebから <https://web.opar.ehime-u.ac.jp>



実施目的

近年発展のめざましいChatGPTをはじめとした生成AI技術は、大学におけるさまざまな業務に大きな影響を及ぼしています。生成AI技術は大学の新しい可能性を示すものといえるでしょう。

本講座は、生成AI技術の利活用を組織的に促進する人材を生成AIコーディネーターとし、そのために求められる知識や態度について学習します。生成AI技術に関する基本的知識を基盤とし、教務や総務などの日常業務での活用事例を共有することはもちろん、所属部署や大学組織の新しいあり方を構想し、改革を推進する役割も担うための方法についても学び、職場における業務改革の推進をも目指したプログラムとなっています。



到達目標

1. 生成AIの基本的なメカニズムを説明することができる
2. 日常業務における生成AIの活用方法と注意点を説明することができる
3. 組織的なAI活用を促進するための体制整備における留意点や工夫を説明することができる
4. 生成AIを活用することによる自組織の課題解決案を作成することができる
5. 生成AIの可能性について参加者相互に知識や経験を共有し学びあう雰囲気に貢献できる

講師

- 中井俊樹 (愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室)
 森木銀河 (九州大学 IR室)
 上月翔太 (愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室)
 久保秀二 (愛媛大学 総務部)
 森田誠 (愛媛大学 研究支援部情報システム課)
 石川尚 (愛媛大学 教育学生支援部教育企画課)
 伊東雅浩 (佐賀大学 経営企画本部経営企画課兼DX推進室)

スケジュール

12月6日(水)

- 13:00 オリエンテーション
 13:20 大学におけるデジタル技術活用の意義 【中井】
 14:20 大学業務における生成AI活用の現状と課題【上月】
 15:10 日常業務における生成AI活用 【森木】
 16:10 生成AI活用のための組織体制の整備 【森木】
 17:00 終了

12月7日(木)

- 9:00 前日の振り返り 【全講師】
 9:10 生成AIの活用事例 【久保・伊東】
 10:20 組織の改革の推進 【石川・森田】
 11:00 生成AIの組織的活用のアクションプランを作成する
 11:00~11:20 趣旨説明
 11:20~12:00 アクションプランの作成
 12:00~13:00 休憩
 13:00~14:20 アクションプランの作成
 14:30 アクションプランの発表
 16:00 まとめとふりかえり 【上月】
 16:30 クロージング
 17:00 終了

事前課題

- 生成AIのメカニズムに関する解説動画の視聴
- ワークシートの作成
 - ①自身や同僚の日常的な業務における生成AIの活用事例
 - ②自大学、自組織における生成AI活用にかかわる方針や内規の有無とその内容
 - ③自大学、自組織における生成AIの業務活用の現状と課題

- * 受付完了後、ワークシートの様式をお送りします。
- * 資料の1枚目右上に、大学名及び氏名をご記入ください。
- * 可能であれば、方針や内規は現物もご提出ください。

- 提出期限:令和5年11月29日(水)
- 提出先:愛媛大学教育学生支援部教育企画課
kiyoiku@stu.ehime-u.ac.jp

- * 提出いただいた課題の内容は、参加者間で共有します。

お問い合わせ

愛媛大学教育学生支援部教育企画課
 TEL:089-927-9154
 mail:kiyoiku@stu.ehime-u.ac.jp

主催/教職員能力開発拠点
 (愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室)
<https://web.opar.ehime-u.ac.jp>

II. FD/SDモデルの構築と普及

a. 研修プログラムの提供

第3期の基本方針に基づき18本の研修プログラムを提供し、参加者総数は268名（令和6年3月10日現在）となった。今年度は、プログラムの内容や時間等に応じてオンライン（同期・非同期）でも実施したが、多くの研修が対面実施となった。本拠点での開催だけではなく、共催校で開催するなど、全国規模での対面開催も再開することができた。また、大学教育における課題に着目した新規講座の開催や、習得したスキルを実践できるようになるためのフォローアップ講座の開催等、受講者のニーズに合わせた研修を提供した。

※各プログラムの内容やアンケート集計結果等の詳細は、P. 31～47に記載。

（本拠点の研修プログラムの特徴）

1. FD/SD/IR/カリキュラム開発の専門家・実践的指導者になりうる人材の育成に力を入れている。
2. FD/SD/IR/カリキュラム開発の各種プログラムを実施している。
3. 新人からベテラン、リーダーまであらゆる立場の教職員にとって日々の業務改善につながる実践的な内容である。
4. 数多くのプログラムは、講義形式だけでなく、講師と受講者の間で行う対話形式や、受講者間のディスカッションによるワークショップ形式等の双方向型で実施されている。

教職員能力開発拠点が提供する研修プログラム(令和5年度)

令和6年3月10日現在

日 程	プログラム名	対象	受講者数	満足度
5月12日(金) 【対面】	ARCS動機づけモデルを活用した学習意欲を高める授業設計	FD	2	100
5月17日(水) 【対面】	学生の学びやすさと学習意欲を高める授業設計 ー課題分析図の活用ー	FD	2	100
5月18日(木) 【対面】	アクティブラーニング入門セミナー	FD	9	100
5月18日(木) 【対面】	ジグソー学習法入門	FD	1	100
5月19日(金)～20日(土) 【対面】	大学教育国際化コーディネーター養成講座	FD/SD	20	100
6月1日(木)～30日(金) 【Mo o d l e】	学習評価の基本	FD	21	100
6月24日(土)～25日(日) 【対面】	ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ	FD	6	100
6月24日(土)～25日(日) 【対面】	アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ	FD	1	100
9月4日(月)～11月30日(木) 【フレキシブル型】	ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ	FD	2	100
9月7日(木)～8日(金) 【対面】	第37回授業デザインワークショップ	FD	22	100
9月20日(水)～22日(金) 【対面】	ファカルティ・ディベロッパー養成講座	FD	7	100
9月20日(水)～22日(金) 【対面】	カリキュラム・コーディネーター養成講座	FD/SD	19	100
11月10日(金) 【対面】	大学職員のための観察力向上セミナー ～現場の状況を的確に把握して伝えるために～	SD	20	100
11月16日(木)～17日(金) 【対面】	教務事務担当者講座(初級編)	SD	43	100
12月6日(水)～7日(木) 【対面】	大学職員のための生成AIコーディネーター養成講座	SD	27	96
12月8日(金)～1月31日(水) 【Mo o d l e】	学生の授業時間外学習を促すシラバス作成法	FD/SD	16	100
12月14日(木)～15日(金) 【Z o o m】	I R e r 養成講座	FD/SD	17	100
2月17日(土) 【Z o o m】	大学職員のためのChat-GPTハンズオンの会 (大学職員のための生成AIコーディネーター養成講座のフォローアップ 講座として実施)	SD	33	100
		合計	268	99.6

ARCS動機づけモデルを活用した学習意欲を高める授業設計

【実施概要】

▶講師

仲道雅輝（愛媛大学教育企画室）

▶日時

令和5年5月12日（金） 13:00～15:00

▶場所

愛媛大学 城北キャンパス
愛大ミュージアム アクティブ・ラーニングスペース2

▶参加者

2名
[学内1名・学外1名_松山大学(1)]

▶目標

1. 「インストラクショナル・デザイン(ID/教育設計)」が課題解決の方法論であることを説明できる。
2. 自分の授業を振り返り、到達目標を明確化するためのポイントが説明できる。
3. 学習者を動機づけるための一つの手法(ARCS動機づけモデル)を活用し、授業設計のヒントを得ることができる。

▶内容

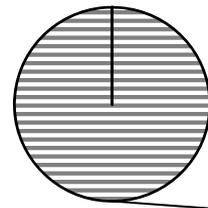
本プログラムでは、これまで自身が実施してきた教育に対する考え方や実施方法について見つめ直し、何が課題であるかについて考えるところからはじめ、教育をより効果的・効率的・魅力的にするための方法論であるインストラクショナルデザイン(教育設計)(以下、IDという)の中から、学習者を動機づけるための手法(ARCS動機づけモデル)や学習者の学びを支援するための働きかけに関する理論を事例とともに学び、ワークショップ形式にて課題解決の糸口を探っていきます。

【アンケート結果】

▶回答者(回答率)

2名(100%)

▶満足度:全体的に満足できるものだった



④ そう思う
100%

▶コメント

〔この研修の良かった点〕

- 学生の動機付けのための重要なポイントを理解できた。とても勉強になりました。
- 具体的事例を交えての説明があり、今後の授業計画に役立てられます。ありがとうございました。



【研修の様子】

学生の学びやすさと学習意欲を高める授業設計 -課題分析図の活用-

【実施概要】

▶講師

仲道雅輝（愛媛大学教育企画室）

▶日時

令和5年5月17日（水） 10:00～12:00

▶場所

愛媛大学 城北キャンパス
愛大ミュージアム アクティブ・ラーニングスペース2

▶参加者

2名
[学内1名・学外1名_松山大学(1)]

▶目標

1. 学習目標を行動目標として明確に表現できる。
2. 自身の教授内容の課題分析図が作成できる。
3. 課題分析の結果をもとに、授業構成の改善案を立てることができる。

▶内容

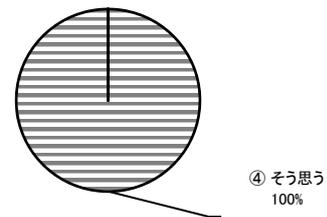
学生の学びやすさと学習意欲を高めるために、いくつかのID（インストラクショナル・デザイン）理論を用いて授業設計の手法を学びます。学習意欲は、学びやすさによって維持・促進され、動機づけによって高めることができます。学びやすさや意欲を設計するためには、教員が自身の教授内容を明確にし、学生目線で再構築する作業が必要です。その第一段階として、学生に対して「この授業で何ができるようになればよいのか」が具体的に伝わる学習目標を提示します。次に教員の頭にある既に構成された教授内容を一旦分解します。これを課題分析といい、分解した学習要素をより学びやすく、意欲の向上に効果的な学習順序になるよう再構築します。本プログラムでは、課題分析のワークを通じて、これからの授業改善に役立つヒントを持ち帰っていただきます。

【アンケート結果】

▶回答者(回答率)

2名(100%)

▶満足度:全体的に満足できるものだった



▶コメント

[この研修の良かった点]

- ヒントがたくさんありました。ありがとうございました。
- 課題分析ワークシートを書いて、他の受講者の方の意見を聞いて、今の状況が冷静に客観的に見られたこと。



【研修の様子】

アクティブラーニング入門セミナー

【実施概要】

▶講師

上月翔太（愛媛大学教育企画室）

▶日時

令和5年5月18日（木） 10:00～12:00

▶場所

愛媛大学 城北キャンパス
愛大ミュージアム アクティブ・ラーニングスペース2

▶参加者

9名
[学内8名・学外1名_松山東雲短期大学(1)]

▶目標

1. アクティブラーニングの意義を説明できる。
2. 適切な学習課題を組み立てるために必要な考え方を説明できる。
3. 授業に学習活動を取り入れる具体的な工夫を複数挙げることができる。

▶内容

1. アクティブラーニングを理解する。
2. 学習課題を組み立てる。
3. 学習活動を組み立てる。



【研修の様子】

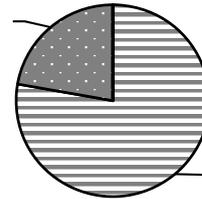
【アンケート結果】

▶回答者(回答率)

9名(100%)

▶満足度:全体的に満足できるものだった

③ どちらかといえばそう思う
22%



④ そう思う
78%

▶コメント

[この研修の良かった点]

- 経験を学習するための振り返りや発問、助言を積極的に行い、学習のサイクルを促すようにしていこうと、今後の方針ができた。
- 全体的に分かりやすく、特に発問のパートは授業にすぐに取り入れたいです。ありがとうございました。
- アクティブラーニングを「自立の仕方」を学ばせるものと理解できた点。
- 授業の目標設定と振り返りの重要性を理解できたため、今後の改善に活かします。

[この研修の改善点]

- 他のグループからの意見や経験も聞きたかったです。
- 最後の経験学習について、もう少し詳しく伺いたいです。経験を省察→概念にする際、大学では専門的知識を踏まえた概念化・一般化が重要だと思いますが、以前勤めていたところでは、そこがうまくいかず、経験しっぱなし、やりっぱなし・・・が常態化していました。中学校高校とは違う、大学のPBLについて学ぶコンテンツ、教材があれば教えていただきたいです。
- 他の関連する研修とのつながりなどを具体的に明記すると、よりわかりやすくなると思います。
- 4月に開催されても良いかもしれません。

ジグソー学習法入門

【実施概要】

▶講師

村田晋也（愛媛大学教育企画室）

▶日時

令和5年5月18日（木） 13:00～15:00

▶場所

愛媛大学 城北キャンパス
愛大ミュージック アクティブ・ラーニングスペース2

▶参加者

1名
[学外1名_聖カタリナ大学(1)]

▶目標

1. ジグソー学習法の基本的な仕組みについて説明できる。
2. ジグソー学習法を用いたグループワークの進め方を体験し、授業での活用を検討できる。

▶内容

社会心理学者K. レヴィンをはじめとした集団力学を専門とする研究者たちによってこれまで種々実証されてきたように、グループワークは、受講者が学習に対する積極的な姿勢を抱けるよう変化を促すのに有効な手法として注目されてきました。とりわけこの手法は近年、学校教育の場で広く導入されていることは周知のとおりです。

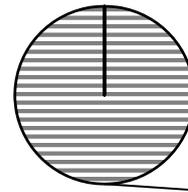
本講では、数あるグループワークの手法のうち、社会心理学者E. アロンソンが1978年著書The Jigsaw Classroom（松山安雄訳『ジグソー学級 生徒と教師の心を開く協同学習法の教え方と学び方』）で提唱した「ジグソー学習法」に注目し、この学習法を用いた授業の進め方とその効果について紹介することを主な目的とします。

【アンケート結果】

▶回答者(回答率)

1名(100%)

▶満足度:全体的に満足できるものだった



④ そう思う
100%

▶コメント

〔この研修の良かった点〕

○具体例を出していただき、参考になることが多かった。

〔この研修の改善点〕

○人数の関係でワークができなかったこと。



【研修の様子】

大学教育国際化コーディネーター養成講座

【実施概要】

▶講師

大津正知(茨城大学)
大枝さやか(国際基督教大学)
大竹秀和(立教大学)
宮林常崇(東京都立大学法人)
村上健一郎(横浜国立大学)
中井俊樹、上月翔太、岩田剛(愛媛大学)

▶日時

令和5年5月19日(金)～20日(土)

▶場所

愛媛大学 城北キャンパス
愛大ミュージック アクティブ・ラーニングスペース2

▶参加者

20名

[学内2名・学外18名 佐賀大学(2)、東京学芸大学(1)、共立女子大学(1)、同志社大学(1)、京都先端科学大学(1) 龍谷大学(1)、京都産業大学(1)、中央大学(1)、白百合女子大学(1)、名古屋経済大学(1)、芝浦工業大学(1)、大阪教育大学(1)、成蹊大学(1)、高知大学(1)、東洋大学(1)、公立千歳科学技術大学(1)、島根大学(1)]

▶目標

1. 大学教育の国際化が求められる意義と背景を説明できる。
2. 学生の海外への送り出しにかかわるプログラム設計や学生支援の方法や留意点を説明できる。
3. 留学生を受け入れる際の留意点やプログラム設計、学生支援の方法を説明できる。
4. 大学教育の国際化に向けた自大学の組織的課題と改善策を示すことができる。
5. 大学教育の国際化に関する多様な考え方や経験を尊重し、共に学び合う雰囲気をつくることができる。

▶内容

《1日目》

1. オリエンテーション・アイスブレイク
2. 大学教育の国際化とその課題
3. 日本の大学における国際化と大学組織
4. 国際化に対応する教務
5. 海外派遣プログラムの設計
6. 海外留学の支援
7. 留学生にかかわる制度
8. 留学生の募集と受入れ

《2日目》

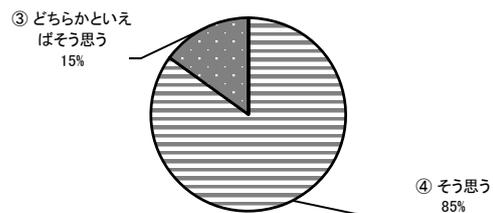
1. 留学生への支援
2. 国際化を支える組織と人材
3. 大学教育の国際化に向けた課題解決を検討する
4. 全体共有とふりかえり・クロージング

【アンケート結果】

▶回答者(回答率)

20名(100%)

▶満足度:全体的に満足できるものだった



▶コメント

〔この研修の良かった点〕

- 国際関連業務について網羅されており、俯瞰的に課題を整理するのに役立った。また、副学長から担当係員まで幅広い参加者層を得られたことで、実務面の葛藤や課題についても聴くことができた。
- 現場での困りごとを対面でシェアし意見交換できた点。それを可能にしたワークの設定。
- 私は初任者なので、幅広い知識や背景を根拠とともに示されていた点は大変有り難かった。また、他大学の取り組み事例を伺うことができた点は、本学の体制、制度の改善にも活かされることと思う。何より、モチベーションが高まった。

〔この研修の改善点〕

- アクションプランは自身の今後についての具体的行動計画ができた点がほかの研修とは違う点でよかったが、あえて言えば、研修の各講座内容を生かしたアクションプラン、関連性を持たせてのアクションプランの策定という流れがあれば、よりよいと思った。
- 国際化をコーディネートすると聞くと、やはり教務担当者としては敷居が高い印象はあります。ケーススタディで学ぶような内容があると、教務担当者も気持ち的に少し気軽に参加できるのではないかなと思いました。



【集合写真】

学習評価の基本

【実施概要】

▶講師

上月翔太（愛媛大学教育企画室）

▶日時

令和5年6月1日（木）～6月30日（金）

▶場所

オンライン開催（愛媛大学Moodle）

▶参加者

21名

[学内16名・学外5名_愛媛県立医療技術大学(2)、松山東雲短期大学(1)、高知リハビリテーション専門職大学(1)、香川短期大学(1)]

▶目標

1. 学習評価の意義と目的を説明することができる。
2. 学習評価の基本原則を説明することができる。
3. 適切な評価の方法・基準を選択・設定できる。
4. 適切で効果的なフィードバックを行うことができる。
5. 自身の授業における学習評価の改善案をあげることができる。

▶内容

1. 学習評価の構成要素
2. 学習評価の方針
3. 学習評価の方法
4. 学習評価の実践

評価対象

- 何を測りたいのか？
- 教育目標の3分類（ブルーム・タクソノミー）
 - 認知領域（あたま）、精神運動領域（からだ）、情意領域（こころ）

6	創造		
5	評価	自然化	個性化
4	分析	分節化	組織化
3	応用	精密化	価値づけ
2	理解	巧妙化	反応
1	知識	模倣	受け入れ
レベル	認知領域	精神運動領域	情意領域

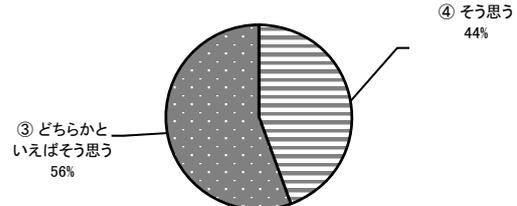
【資料より】

【アンケート結果】

▶回答者(回答率)

18名(86%)

▶満足度:全体的に満足できるものだった



▶コメント

〔この研修の良かった点〕

- 評価基準を整理して示してもらえたので、実際の担当授業時に行っている評価と照らし合わせながら視聴することができた点。
- フィードバック・サンドイッチというものを知ることができた。これまでポジティブで始まりネガティブで終わっていたため、今後は意識してポジティブで終わるようにしたい。
- 客観テストの種類を明示的に把握でき、今後のテスト作成の際の参考になった。
- 教員になったばかりで、評価についてどのように知識を得るか困っていた。基本的な事項について、簡潔かつ網羅的に学ぶことができたので大変ありがたかった。
- 特にフィードバックの方法が勉強になりました。自分が大学生の頃を思い返すと、あまりこのようなものはなかったように思います（期末テストやレポート課題が返ってきたことはありませんでした）。試験を受けっぱなし、レポートを書きっぱなしではなく、良い点と改善点を学生教員がお互いに伝え合うことで、より学びが深まると考えます。

〔この研修の改善点〕

- 評価の実際について、ケーススタディがあるとより理解が進むと思います。
- ある事柄を実施した場合と実施しなかった場合の学生の反応（インタビューまたは文字の感想）があるとより実感が湧きやすいと思います。
- スライドの動画だけでは、少し単調になるので、講師の先生のお話している様子など、画面に変化があるとメリハリが出てより集中しやすくなると思います。
- オンデマンド型では難しいかもしれないが、ルーブリックを作ってみるワークなどがあると、より理解が深まるかもしれない。

ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ

【実施概要】

▶講師

松本高志、川畑成之(阿南工業高等専門学校)
仲道雅輝、村田晋也、上月翔太、高橋平徳、丸山智子
(愛媛大学教育企画室)
中山晃、KAWAMOTO JULIA MIKA
(愛媛大学英語教育センター)

▶日時

令和5年6月24日(土)～25日(日)

▶場所

愛媛大学 城北キャンパス 愛大ミュージアム3階M32 ほか

▶参加者

6名
[学内5名・学外1名_松山東雲短期大学(1)]

▶目標

1. ティーチング・ポートフォリオ(TP)とは何かを説明できる。
2. ティーチング・ポートフォリオの必要性・有効性について説明できる。
3. ティーチング・ポートフォリオ作成の要点と手順を説明できる。
4. ティーチング・ポートフォリオを作成できる。

▶内容

《1日目》

1. オリエンテーション
2. 第1回個人ミーティング
3. TP作成作業
4. 第2回個人ミーティング

《2日目》

1. TP作成作業
2. 第3回個人ミーティング
3. TP作成作業
4. 第2校原稿確認
5. TP発表・閉会式

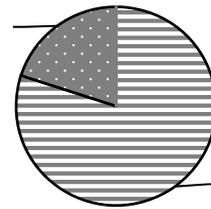
【アンケート結果】

▶回答者(回答率)

5名(83%)

▶満足度:全体的に満足できるものだった

③どちらかといえば
思う
20%



④そう思う
80%

▶コメント

[この研修の良かった点]

- 対面で指導を受けられた点。
- ティーチング・ポートフォリオの書き方を学べて、自分自身のこれまでの教育活動について振り返る機会を持ったこと。
- メンターの先生をはじめ、他機関の先生方とのコミュニケーションを通じて、教員の仕事の魅力を再確認できた。自分が教育を通じて実現したい未来を信じて、教員としての機会を最大限に活かしたいと前向きな気持ちになれたことが一番の収穫かもしれない。

[この研修の改善点]

- 最初に全体での自己紹介や、初日の夕方に進捗の報告会があると、他の先生と共通する部分について意見交換などしやすかったかもしれない。
- 開催時期や受講方法の柔軟性等を改善していただければ、より多くの方がワークショップに参加しやすくなるのではないかと考える。



【研修の様子】

アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ

【実施概要】

▶講師

松本高志(阿南工業高等専門学校)
仲道雅輝(愛媛大学教育企画室)

▶日時

令和5年6月24日(土)～25日(日)

▶場所

愛媛大学 城北キャンパス 愛大ミュージズ3階M32 ほか

▶参加者

1名
[学外1名_富山県立大学(1)]

▶目標

1. アカデミック・ポートフォリオ(TP)とは何かを説明できる。
2. アカデミック・ポートフォリオの必要性・有効性について説明できる。
3. アカデミック・ポートフォリオ作成の要点と手順を説明できる。
4. アカデミック・ポートフォリオを作成できる。

▶内容

《1日目》

1. オリエンテーション
2. 第1回個人ミーティング
3. AP作成作業
4. 第2回個人ミーティング

《2日目》

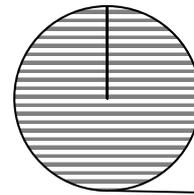
1. AP作成作業
2. 第3回個人ミーティング
3. AP作成作業
4. 第2校原稿確認
5. AP発表・閉会式

【アンケート結果】

▶回答者(回答率)

1名(100%)

▶満足度:全体的に満足できるものだった



④そう思う
100%

▶コメント

〔この研修の良かった点〕

○アカデミック・ポートフォリオを作成し、前向きになれた。
混沌とした現実を振り返る時間をもらい、メンターがリードして下さることで、自分の新たな価値観を見いだせた。

〔この研修の改善点〕

○現在のワークショップの形式を形骸化せず、拡張性のある方法も含めてご検討いただきたい。



【TP・AP合同集合写真】

ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ

【実施概要】

▶講師

仲道雅輝、村田晋也、上月翔太(愛媛大学教育企画室)

▶日時

令和5年9月4日(月)～11月30日(木)

▶場所

愛媛大学城北キャンパス 及び オンライン

▶参加者

2名
[学内2名]

▶目標

1. ティーチング・ポートフォリオ(TP)とは何かを説明できる。
2. ティーチング・ポートフォリオの必要性・有効性について説明できる。
3. ティーチング・ポートフォリオ作成の要点と手順を説明できる。
4. ティーチング・ポートフォリオを作成できる。

▶内容

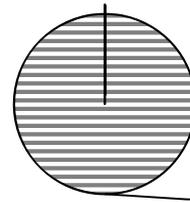
1. オリエンテーション(Moodle)
2. 第1回個人ミーティング
3. TP作成
4. 第2回個人ミーティング
5. 初稿 作成・提出
6. 第3回個人ミーティング
7. TP作成 第二稿提出
8. フィードバック
9. 第三稿 作成・提出
10. メンターコメント
11. 最終稿 提出

【アンケート結果】

▶回答者(回答率)

1名(50%)

▶満足度:全体的に満足できるものだった



④そう思う
100%

▶コメント

[この研修の良かった点]

○あやふやだった教育の目標や今後の目標を明確にすることができました。自分の教育を改善するために有効な手段と感じました。

ティーチング・ポートフォリオ(TP)とは

教員個人の教育活動について振り返り、自らの言葉で記し、多様な根拠資料によってこれらの記述を裏付けた教育業績についての厳選された記録(栗田、2012)

- 厳選された記録なので、ページ数に制限がある。
- 本文は全体で8～10ページ
- エビデンス(根拠資料)とあわせて3cmファイルに収まるようにする。

【資料から】

第37回授業デザインワークショップ

【実施概要】

▶講師

杉森正敏、中井俊樹、仲道雅輝、村田晋也、上月翔太
(愛媛大学教育企画室)

▶日時

令和5年9月7日(木)～9月8日(金)

▶場所

愛媛大学 城北キャンパス
共通講義棟A 4階 ALルーム

▶参加者

22名

[学内19名・学外3名 愛媛県立医療技術大学(1)、松山大学(1)、松山東雲短期大学(1)]

▶目標

1. 学生の学習を促すシラバスを書くことができる。
2. さまざまな授業方法の特徴を理解し、学習目標に適した授業方法を選択できる。
3. 教育評価の原理と種類を理解し、学習目標に適した評価方法を選択できる。
4. アクティブラーニングを取り入れた90分の授業の計画を作成できる。
5. 作成した授業計画案にもとづいて模擬授業を実践できる。

▶内容

【1日目】

1. オリエンテーション
2. アイスブレイク
3. ミニ講義Ⅰ「コース設計」
4. ミニ講義Ⅱ「クラス設計」
5. ミニ講義Ⅲ「学習評価の基本」
6. ミニ講義Ⅳ「学習者の学びを促進する様々な授業方法」
7. 授業に関するお悩み相談会
8. 担当科目のシラバスと90分の授業案作成

【2日目】

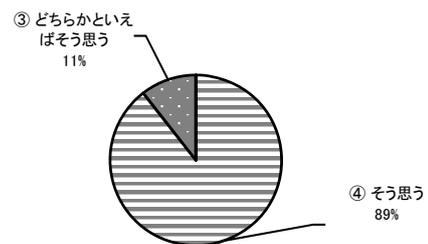
1. シラバスと授業案に対するピア・レビューおよび模擬授業の準備
2. 模擬授業
3. 振り返り
4. 閉会式

【アンケート結果】

▶回答者(回答率)

19名(86%)

▶満足度:全体的に満足できるものだった



▶コメント

〔この研修の良かった点〕

- シラバスや授業設計で、授業や各回の目標を明確にし、それを評価につなげて考えることが具体的にイメージできたこと。
- アクティブラーニングに様々な選択肢があることが学べたこと。
- コーチの方や他の受講生の方と議論する機会が多くて大変充実したワークショップだったこと。

〔この研修の改善点〕

- 授業経験が豊富な方から、授業経験が全くない方まで様々だったので、そういった人たちをバランスよくグループ分けして、意見交換する時間や模擬授業&ディスカッションの時間をもっと増やせれば良いのではないかと思った。
- ピア・レビューの時間が短く感じました。シラバスや90分の授業設計が模擬講義に関係している場合、模擬講義を受けるにあたってシラバスや授業設計を確認したので、時間に余裕がなかった。



【集合写真】

ファカルティ・ディベロッパー養成講座

【実施概要】

▶講師

榊原暢久、恒安眞佐、鈴木洋(芝浦工業大学)
仲道雅輝、村田晋也(愛媛大学教育企画室)

▶日時

令和5年9月20日(水)～9月22日(金)

▶場所

芝浦工業大学豊洲キャンパス

▶参加者

7名

[学外7名_芝浦工業大学(2)、国士舘大学(1)、東京工芸大学(1)、立教大学(1)、麻布大学(1)、福岡女子大学(1)]

▶目標

1. 所属する機関において、なぜFDが必要なのかを説得力をもって説明できる
2. 所属する機関のFD活動を振り返り、特徴と課題を抽出することができる
3. FDのさまざまな場面で求められる課題解決の方法を提案することができる
4. FDに関する多様な考え方や実践事例を尊重し、共に学びあう雰囲気貢献する
PowerPointで動画を表示することができる

▶内容

《1日目》

1. オリエンテーション
2. 所属大学のFD活動の振り返り
3. FDを理解する
4. FDを設計する
5. 研修を運営する
6. 授業コンサルティングを運営する

《2日目》

1. 学生参画型FDを運営する
2. ティーチングポートフォリオを取り入れる
3. ファカルティ・ディベロッパーとして成長する
4. 演習:FDの企画案を作成する・個別コンサル

《3日目》

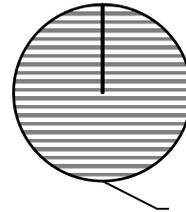
1. 演習:FDの企画案の発表と共有
2. まとめと振り返り
3. クロージング

【アンケート結果】

▶回答者(回答率)

7名(100%)

▶満足度:全体的に満足できるものだった



▶コメント

【この研修の良かった点】

- アウトプットとそれに関するカウンセリングの時間があったこと。
- 他大学の取り組みや先進校の取り組みを実践的に知れたこと。自分の学校でどのように実践するかを検討するワークがあったこと。
- 事前課題では自大学のFD活動の振り返り、改めて特徴と課題を認識することができました。研修では「FDとは」ということ、また他大学の特徴的な取り組みを知ることができたので、理解を深めることができました。後半は実際のFDを企画することで具体的な課題がみえました。その後実施に向けても様々なアドバイスをいただき、他大学の事例も知れたので、実施に向けて取り組んでいきたいと思います。

【この研修の改善点】

- 強いて言うならば、1日目または2日目に懇親会ができるようになると思います。



【集合写真】

カリキュラム・コーディネーター養成講座

【実施概要】

▶講師

竹中喜一(近畿大学)
中井俊樹、上月翔太、坂本規孝(愛媛大学教育企画室)

▶日時

令和5年9月20日(水)～9月22日(金)

▶場所

芝浦工業大学豊洲キャンパス

▶参加者

19名

[学外19名_芝浦工業大学(3)、大阪体育大学(3)、岡山県立大学(1)、沖縄大学(1)、高崎経済大学(1)、秀明大学(1)、尚綱学院大学(1)、城西大学(1)、神奈川大学(1)、青森県立保健大学(1)、大阪経済大学(1)、筑紫女学園大学(1)、長野大学(1)、東洋学園大学(1)、美作大学・美作大学短期大学部(1)]

▶目標

1. 所属組織において、なぜカリキュラムの改善が必要なのかを説得力をもって説明できる。
2. 大学のカリキュラムの特徴と編成の方法を説明することができる。
3. 学習成果の評価における方法と留意点を説明することができる。
4. 所属組織のカリキュラムの特徴と課題を抽出することができる。
5. カリキュラムに関するさまざまな課題解決の方法を提案することができる。
6. 大学のカリキュラムに関する多様な考え方や実践事例を尊重し、共に学びあう雰囲気貢献する。

▶内容

《1日目》

1. オリエンテーション
2. 教学マネジメントの背景と意義
3. 自大学のカリキュラムの特徴と課題
4. DPの見直しと修正
5. カリキュラムの編成と実施
6. 授業科目数の適正化

《2日目》

1. 学習成果の評価
2. 教学マネジメントの組織体制
3. 課題解決案の立案にむけて
4. 個人ワーク、相談、グループ内中間発表

《3日目》

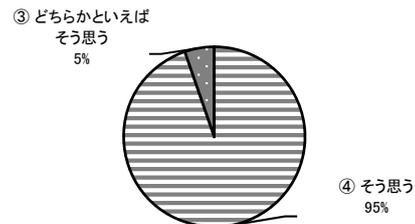
1. 課題解決案の発表とディスカッション
2. まとめと振り返り
3. クロージング

【アンケート結果】

▶回答者(回答率)

19名(100%)

▶満足度:全体的に満足できるものだった



▶コメント

〔この研修の良かった点〕

○カリキュラムについて知識を得たり、情報を共有する機会がなく、今考えている改善の方向性が正しいのか、また過不足がないか等、先生方の知見を伺えたことでより明確になった。

○人事異動により徐々に教務に携わることとなり、今の時代に求められる教学マネジメントの大枠とポイントを体系的に学べたこと。今後、実務でのカリキュラムの諸問題の考え方やジャッジの際に何にポイントを置いてどう考えればよいか理解できた。今後の自分の学びを深めるきっかけとなった。

○講義とグループワークのバランスがよく、実務につながる情報を得ることができました。各大学のカリキュラム改編の取り組みも伺うことができ、大変参考になりました。

〔この研修の改善点〕

○Jambordはリアルタイムでの共有ができ良いと思いましたが、あえて書かせていただくと、操作しづらい面や、自由度が低い面、作成しづらい面も感じました。

○グループ以外で、お話をさせていただきたい大学の方がいたが、どの方かわからなかった。参加者一覧表と研修冒頭に各自一言だけ挨拶があれば認識できたのではないかとと思う。



【集合写真】

大学職員のための観察力向上セミナー ～現場の状況を的確に把握して伝えるために～

【実施概要】

▶講師

比嘉夏子、水上優(合同会社メッシュワーク)

▶日時

令和5年11月10日(金)13:00～17:00

▶場所

大阪工業大学 梅田キャンパス OIT梅田タワー3階

▶参加者

20名

[学内3名・学外17名 高知大学(3)、香川大学(2)、徳島大学(2)、神戸大学(2)、広島市立大学(1)、龍谷大学(1)、愛知大学(1)、藍野大学(1)、平成国際大学(1)、京都大学(1)、大阪国際大学(1)、京都ノートルダム女子大学(1)]

▶目標

1. 現場の状況を観察し、他の人に伝えることができるようになる。
2. 人によって視点が多様であることを理解する。
3. 現場の課題を定義づけするための人類学的アプローチの有用性を知る。

▶内容

1. 開会挨拶
2. 各自の現場の課題感について共有
3. 講義「現場を観ることの重要性」
4. ワーク「状況を記述する」
5. ワークに関するグループディスカッションと全体共有
6. 講義「人類学的なアプローチによる人や組織の理解」
7. 振り返りと質疑応答



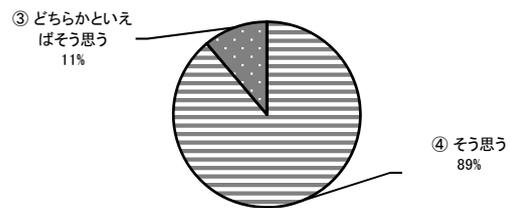
【研修の様子】

【アンケート結果】

▶回答者(回答率)

18名(90%)

▶満足度:全体的に満足できるものだった



▶コメント

【この研修の良かった点】

○「観察」という点に終始フォーカスが当てられており、それを学術的な観点からわかりやすくレクチャーいただけたこと。

○組織で働く仲間が見えているものと私が同じものを見ても、見えているものが違っている可能性があることを知ることができた。また、それを概要として言語化したときに表現が全く異なり、事実と主観が入り混じっている可能性があること、その自分や仲間はそれぞれのバイアスを持ち、その特性を活かすことが組織活性化(チームワークの質向上)につながるのではないかとという視座を得たことが大きな収穫となった。

○自身のアウトプットの性質を認識し、持っているバイアスを強く感じることができました。今後はそれらを良い方向に尊重しながら、事実や周囲との認識のズレを解消していきたいと思います。

○ワークで実体験を伴う学びができたこと。同じ志の人たちとその作業をできたことが大きいです。

【この研修の改善点】

○講師から通常ミニマムでも1か月くらいかけて行う短縮版と聞きました。オンラインなども組み合わせながら、中長期的に学べると日常業務との往復の中でより観察力の精度が上がっていくのではないかと感じました。

○研修開始時のグループ内での課題共有にももう少し時間があれば良かった。

教務事務担当者講座(初級編)

【実施概要】

▶講師

宮林常崇(東京都公立大学法人)
小野勝士(龍谷大学)
大津正知(茨城大学)
吉岡瞳(高知大学)
中井俊樹(愛媛大学教育企画室)

▶日時

令和5年11月16日(木)～11月17日(金)

▶場所

高知大学 朝倉キャンパス

▶参加者

43名

[学内9名・学外34名_高知大学(17)、岡山大学(2)、高知工科大学(2)、人間環境大学(2)、せとうち観光専門職短期大学(1)、岡山理科大学(1)、京都女子大学(1)、京都文教大学(1)、広島文教大学(1)、志學館大学(1)、鹿児島国際大学(1)、女子美術大学(1)、城西大学(1)、徳島大学(1)、琉球大学(1)]

▶目標

1. 教務事務の代表的な業務の根拠や背景を理解することができる。
2. 大学の裁量を理解し担当業務に活かすことができる。
3. 教務事務の的確な遂行に必要な情報を自ら収集し、担当業務へ活用することができる。
4. 教育プログラムの開発を職員の立場で支援することができる。

▶内容

《1日目》

1. オリエンテーション
2. 教務事務の心構え
3. 法令の読み方
4. 教務事務を取り巻く法令・制度 I
5. ケーススタディ
～大学の裁量を理解し適切に対応する～

《2日目》

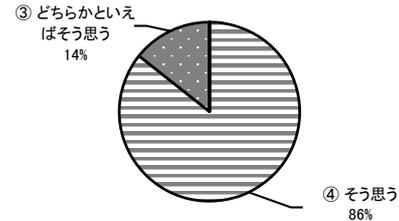
1. 教務事務を取り巻く法令・制度 II
2. ケーススタディ②
～教育プログラムの開発を支援する～
3. 教務系業務を探究する
4. まとめと振り返り

【アンケート結果】

▶回答者(回答率)

42名(98%)

▶満足度:全体的に満足できるものだった



▶コメント

〔この研修の良かった点〕

- 教務業務に関係する法令をほとんど知らなかったので、読み方から丁寧に教えてもらえてよかった。
- 知識があれば学生の強い味方にもなりえるし、知識が少なく言われた通りの仕事しかできなかつたら学生の可能性を狭めてしまうと強く感じた。大学に帰ったら、今回学んだことと学内の規則と照らし合わせて、学生のために知識を増やしていきたい。
- 各問い合わせがあった際に、私はメールや会議資料から過去の対応を確認していましたが、その対応が何を根拠に判断されたかという点を全く考えたことがありませんでした。今回の研修で法令などを確認することの重要性を理解することができました。

〔この研修の改善点〕

- 窓口対応等、実践的な場面での行動について学ぶ時間ももっと多くあればよかったかなと感じた。現場に帰ってすぐに使えるような知識や流れ等をより多く習得できればいいなと感じた。
- 私は教務事務の経験が全くない状態で受講したため、研修序盤では教務事務の業務の範疇をつかむことが難しかった。研修の序盤に、未経験でも業務の全体像がつかめるような説明を3～5分ほどでも、設定してもらえると後々の研修の充実度が変わると感じた。



【研修の様子】

大学職員のための生成AIコーディネーター養成講座

【実施概要】

▶講師

森木銀河(九州大学)
伊東雅浩(佐賀大学)
中井俊樹、上月翔太、久保秀二、森田誠、石川尚
(愛媛大学)

▶日時

令和5年12月6日(水)～12月7日(木)

▶場所

愛媛大学 城北キャンパス
愛大ミュージアム アクティブ・ラーニングスペース2

▶参加者

27名

[学内4名・学外23名、高知大学(3)、大阪体育大学(2)、徳島大学(2)、松山大学(2)、北海学園大学(2)、金沢大学(2)、高知県立大学(2)、安田女子大学(1)、香川高等専門学校(1)、追手門学院大学(1)、滋賀大学(1)、関西学院大学(1)、大阪公立大学(1)、共愛学園前橋国際大学(1)、聖徳学園(1)]

▶目標

1. 生成AIの基本的なメカニズムを説明することができる。
2. 日常業務における生成AIの活用方法と注意点を説明することができる。
3. 組織的なAI活用を促進するための体制整備における留意点や工夫を説明することができる。
4. 生成AIを活用することによる自組織の課題解決案を作成することができる。
5. 生成AIの可能性について参加者相互に知識や経験を共有し学びあう雰囲気貢献できる。

▶内容

《1日目》

1. オリエンテーション
2. 大学におけるデジタル技術活用の意義
3. 大学業務における生成AI活用の現状と課題
4. 日常業務における生成AI活用
5. 生成AI活用のための組織体制の整備

《2日目》

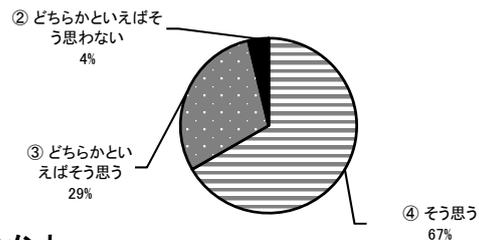
1. 生成AIの活用事例
2. 組織の改革の推進
3. 生成AIの組織的活用のアクションプランを作成する
4. アクションプランの発表
5. まとめとふりかえり・クロージング

【アンケート結果】

▶回答者(回答率)

27名(100%)

▶満足度:全体的に満足できるものだった



▶コメント

〔この研修の良かった点〕

- 生成AIの業務への活用事例、ヒントを得ることができとても有意義でした。参加者皆さんの意識がすごく高く刺激になりました。
- 1番は他大学がどの程度生成AIを利用しているか、どんなツールを使っているかが知れたことが良かったです。まだまだ個人レベルでも活用できていないので、今回知った活用方法を取り入れてみようと思いました。
- 今回組織としてはまだ生成AIの導入について動きがない中、今後の可能性について学び、私自身が”使いこなし”その有用性をPRすることで、導入を進めていこう！と意気込んで参加しました。しかし、研修を受け、使える個人は重要ですが、使う目的、使える仲間、使える環境を整備することが大切であることを学びました。

〔この研修の改善点〕

- 実際に生成AI(自分が使ったことのない種類のもの)を研修内で実際に使う機会があれば、より一層よかったと思う。
- 多数の講師の方々から色々な話を聞けたことは良かったのですが、一つ一つの課題を考える時間が短かったり、省略された部分もあったので、時間に余裕をもてる講義量だとよかったかなと思いました。また、参考ページのURL等がたくさん資料に盛り込まれていたため、できれば資料をデータでもいただきたいです。



【集合写真】

学生の授業時間外学習を促すシラバス作成法

【実施概要】

▶講師

仲道雅輝（愛媛大学教育企画室）

▶日時

令和5年12月8日(金)～令和6年1月31日(水)

▶場所

オンライン開催(愛媛大学Moodle)

▶参加者

16名

[学内9名・学外7名_愛媛県立医療技術大学(3)、高知リハビリテーション専門職大学(2)、徳島大学(1)、松山東雲短期大学(1)]

▶目標

1. シラバスの役割を説明することができる。
2. 授業の「目的」と「到達目標」との違いを説明することができる。
3. 適切な「目的」「到達目標」を書くことができる。
4. 学習者が自学自習に励むようなシラバスを書くことができる。

▶内容

1. 授業デザインの考え方
2. シラバスとは何か？
3. 授業科目名・キーワードの書き方
4. 目的の書き方
5. 目標の書き方
6. 授業概要・スケジュールの書き方
7. 授業時間外での学習を促す戦略
8. 受講条件の書き方
9. 受講ルールの書き方
10. 教材に関わる情報の書き方
11. 評価方法の書き方
12. まとめとふりかえり・クロージング

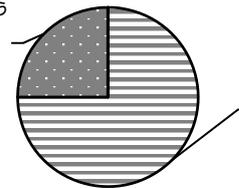
【アンケート結果】

▶回答者(回答率)

16名(100%)

▶満足度:全体的に満足できるものだった

③ どちらかといえば思う
25%



④ そう思う
75%

▶コメント

〔この研修の良かった点〕

○授業時間外での学習を促す戦略や外発的動機づけ、内発的動機づけについてあらためて考えることができたこと。授業時間外学習を促すeラーニングの内容例を整理して知ることができたこと。

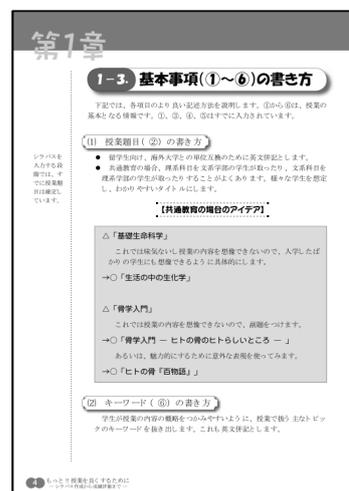
○この研修を受講する時期が、ちょうど来年度のシラバスを作成(見直し)する時期と重なるため、大変参考になった。シラバスの各項目で書くべき内容、誰を主語にするか、曖昧な表現をしないための工夫、目標と評価が一体化するようにするなど、自分のシラバスをよく見直したい。

○シラバスの文章を修正するなどの小テストがとてもよかったです。

〔この研修の改善点〕

○実際のシラバスの形式・フォーマットを示しながら、研修内容との関連・対応を解説すると、より具体的になりわかりやすくなると思う。

○模擬的にシラバスを作成して、その添削を受けるなど、実践的な取り組みがあるとよいと思いました。



【資料から】

IRer養成講座

【実施概要】

▶講師

竹中喜一(近畿大学)
丸山和昭(名古屋大学)
中井俊樹、上月翔太、坂本規孝(愛媛大学教育企画室)

▶日時

令和5年12月14日(木)～12月15日(金)

▶場所

オンライン開催(Zoom)

▶参加者

17名

[学外17名_京都文教大学(3)、静岡福祉大学(2)、京都文教短期大学(1)、駒澤大学(1)、四日市看護医療大学(1)、神田外語大学(1)、星槎道都大学(1)、大阪国際大学(1)、中部大学(1)、帝塚山学院大学(1)、桃山学院大学(1)、日本赤十字看護大学(1)、武庫川女子大学(1)、立教大学(1)]

▶目標

1. IRの意義と方法について説明できる。
2. 学習成果を評価するための方針について説明できる。
3. 学生にかかわるデータを分析し報告するための方法を説明できる。
4. 所属大学におけるIRの改善提案ができる。
5. 多様な考えや経験を尊重し、共に学び合う雰囲気をつくることできる。

▶内容

《1日目》

1. アイスブレイク・オリエンテーション
2. IRの意義と方法を理解する
3. IRの課題を共有する
4. 学生の学習過程を分析する
5. 学生調査を企画・実施する
6. 統計分析を実施する
7. テキストデータを活用する

《2日目》

1. 活用につながる報告を行う
2. IRの組織体制を構築する
3. IRの課題解決を検討する
4. まとめとふりかえり
5. クロージング

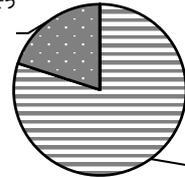
【アンケート結果】

▶回答者(回答率)

15名(88%)

▶満足度:全体的に満足できるものだった

③ どちらかといえば
思う
20%



④ そう思う
80%

▶コメント

〔この研修の良かった点〕

- 分析方法から認知に向けた話まで、基礎的なことも含めつつお話いただけたので、IR事業が具体的に始動しきれていない本学にとってとても有益な講座になりました。ありがとうございました。
- 知識と併せて、実践に向けたプラン作成やそのフォローアップがプログラムに含まれていたこと。他の参加者の状況や課題を共有できたこと。
- 自分の課題や他大学の状況を知ることが出来て良かったです。

〔この研修の改善点〕

- 3つ折りの製本版ではなくても、A4カラー印刷などで大学職員のお勧めの書籍の資料がございましたと良いのかもと思いました。大学教育の質保証シリーズに竹中先生の2巻目の追記もしていただけると受講生の講座以外の自学自習が促進されると思いました。
- 「統計分析」はその場で知識を詰め込んでも実際に自分自身で作業をしないと、なかなか修得できないので、オンデマンド動画で振り返りができるとありがたいと思いました。
- 研修プログラムという形から逸脱しているかもしれませんが、アクションプランを実践していく中でぶつかる課題をフォローアップする仕組みがあるとよりよい活動になるかと思います。



【集合写真】

b. 研修講師派遣

本拠点では、全国の高等教育機関等からの多種多様な研修のニーズに対応できるメニューと体制を整え、講師派遣を行っている。今年度は28機関に対し、35件の講師派遣を行い（令和6年3月10日現在）、研修講師や研修内製化のためのアドバイスを行う等、それぞれの組織で必要とされる人材育成の取り組みに、本拠点のノウハウを提供した。講師派遣先には、事後に報告書やアンケート結果の提出を依頼し、その成果の確認や今後の改善に供している（講師派遣先から提出された報告書の一部をP.50～54に掲載）。

<令和5年度講師派遣件数>

令和6年3月10日現在

地区	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州	合計
派遣件数	0	2	10	3	11	4	3	2	35

<講師派遣先での研修プログラム例>

- ◆学習者を刺激する発問 —授業・実習に活かす発問—
 - ◆ティーチング・ポートフォリオ導入と作成
 - ◆アクティブラーニングの課題と効果的な実践例
 - ◆コンピテンシーを育成するアクティブラーニング
 - ◆カリキュラム・コーディネーター養成研修会（評価編）
 - ◆ファカルティ・ディベロッパー養成研修会（初級編）（中級編）
 - ◆学習支援コーディネーター養成研修会
 - ◆事例から考えるハラスメント
- 等

<研修講師派遣先からの声（事後アンケート自由記述より一部抜粋）>

- ・アセスメントポリシーに基づく学内のアセスメント活動について、実際のプロセスやそこで生まれたご担当の先生の気持ちなどをお聞きすることができた。
- ・カリキュラムとデジタル化、認証評価、また、学生サポートなど、一連の流れの関連性やトピックスがまとめられており大変興味深かった。
- ・なぜ教職員に倫理が求められるのかという問いに対してこれまでは漠然としか考えが浮かばなかったが、今回グループでのディスカッション等も通して自身の考えが深まったと感じる。
- ・ティーチング・ポートフォリオの作成方法に関して、実際に作成の過程を体験することで、実感を持って理解することができ、非常に勉強になった。導入のための条件や活用方法など、さらに詳しく調べてみたいと思う。
- ・つい一方的な授業になりがちなので、発問の機会を増やし、その後の沈黙を恐れず、学生が考える時間をしっかり取りたいと思う。

<組織開発支援を目的とした講師派遣>

「第3期教職員能力開発拠点の事業等に関する基本方針」に基づき、組織開発支援を目的とした講師派遣を行っている。この取り組みでは、カリキュラム改善や研修体系の構築といった特定の課題解決に向けたコンサルティング等、依頼元の高等教育機関が持つ個別のニーズに沿った支援を提供している。以下に令和5年度の取り組みの例を示す。

◆カリキュラムのスリム化に関する支援

依頼元機関におけるカリキュラムの抜本的な改革を推進するための取り組みに、複数回本拠点教員を派遣した。特にカリキュラムにおける授業科目数のスリム化について、関連する教職員全体に対して研修の講師を務めた他、取り組みを中心的に担う教職員との意見交換会の実施、外部で開催された関連研修の紹介などを通じ、依頼元機関のカリキュラムに焦点を当てた組織開発を支援した。

◆ディプロマ・ポリシー等の見直しに関する支援

依頼元機関におけるディプロマ・ポリシーの見直しについて支援を行うため、複数回本拠点教員を派遣した。依頼元機関が全学的に設定した能力枠組みを各学部学科のカリキュラムに対応させるために、改革の中心となる教職員への勉強会や助言を行ったほか、全学FDでの講演を実施し教職員全体のカリキュラムへの基本的な理解の促進に取り組んだ。加えて、授業科目数の適正化や共通教育の位置づけなどについて意見交換を実施するなど、依頼元機関におけるカリキュラムのさまざまな課題への取り組みを支援した。

◆FDに関する支援

依頼元機関の教育内容の改善及び向上を目的としたFD活動において、取り組みの活性化や後進の育成を図るため、アドバイザーとして定期的に講師を派遣した。新任教員を対象にした研修の実施を講師として務める他、FD活動に関する助言や指導、年間計画の策定支援、特定テーマに関する専門性をもつ他の講師の紹介を行うなど、依頼元組織のFD活動を活発にするためのアドバイジング業務を行った。

◆学部設置・運営に伴う組織開発支援

依頼元機関の学士課程プログラム構想において、学部設置・運営に伴う組織開発の支援を行った。カリキュラムの編成と実施を中心として、社会情勢、人材育成目的、三つの方針の関連性を視野に入れながら教学マネジメントの実装を目指し、アドバイザーとして定期的にヒアリング、意見交換、提案を行い、当該機関の学士課程プログラム構想の実現に向けた継続的な支援に取り組んだ。

東京都立大学からの報告書

研修名：2023年度FDセミナー

講師：中井 俊樹（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 教授）

参加者：95名（教員77名、職員17名、学生1名） / 会場：オンライン

<概要等>

本セミナーのテーマを「教育改善に取り組むための組織づくり」と設定し、愛媛大学の中井俊樹氏に基調講演としてご発表いただいた。

講演の内容は主に「学修成果の評価とその意義」、「カリキュラムとその構成要素」、「評価を活用した教育改善の体制」であった。その後、学内の取組発表として、部局のアセスメントの取組について経済経営学部と理学部の教員に発表いただいた。最後に中井先生と本学教員にてパネルディスカッションとして、アセスメントによる教育改善や、組織づくりについて意見交換を行った。



早稲田大学からの報告書

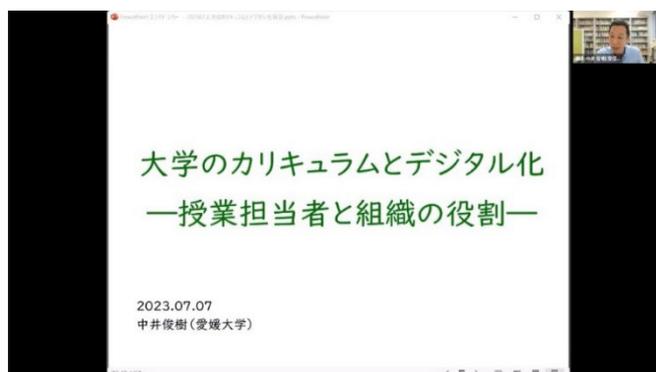
研修名：第2回 Faculty Café「大学のカリキュラムとデジタル化ー授業担当者と組織の役割ー」

講師：中井 俊樹（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 教授）

参加者：48名（教員36名、職員12名） / 会場：オンライン

<概要等>

愛媛大学の中井俊樹氏を講師として、「大学のカリキュラムとデジタル化ー授業担当者と組織の役割ー」をテーマにZoomによるオンラインでの研修を行った。はじめに、講師より「大学カリキュラムの特徴」「大学教育とデジタル化」「カリキュラムの構成要素とデジタル化」の三部構成による講義をいただき、参加者には講義内容に関する質問や意見等をチャット機能にて随時投稿いただく形で実施した。後半には、講師より提示された課題について参加者同士で意見交換を行うブレイクアウトルームセッションも設けられ、各グループで活発な意見交換が行われた。事後アンケートより、参加者の満足度も高く、自由記述では、研修テーマである大学のカリキュラムとデジタル化についての理解が深まったとの意見が多く見られた。



京都看護大学からの報告書

研修名：「学生の思考を刺激する発問－授業と実習で活用する発問－」

講師：中井 俊樹（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 教授）

参加者：29名（教員29名） / 会場：オンライン

<概要等>

愛媛大学の中井俊樹氏を講師に、「学生の思考を刺激する発問－授業と実習で活用する発問－」をテーマに研修を行った。

はじめに、「学生の思考を刺激する発問－授業と実習で活用する発問－」の講演を聴講し、その後、発問に係るグループワーク（4～5人/グループ）を実施し、5グループから討議内容の発表を行い、講師からフィードバックを受けた。

研修終了後には受講者から発問方法や発問内容、グループ分けの方法に関して多くの質問が出され、講師との活発な意見交換がなされた



愛媛県立医療技術大学からの報告書

研修名：「学生支援大学教職員の倫理－学生との関係を省察する」

講師：上月 翔太（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 講師）

参加者：50名（教員38名、職員10名、理事2名）

会場：愛媛県立医療技術大学南棟1階117教室

<概要等>

愛媛大学の上月氏を講師に、「学生支援大学教職員の倫理－学生との関係を省察する」をテーマにハラスメント研修を行った。

まず、ハラスメントを考える上で、倫理の必要性について学習した。その後、講師の指示を受けて実際に動いてみることで、意図していなくても教員と学生間の力関係が発生しており、学生は違和感を持っていても教員の指示に従って動いてしまうということを体感した。

その上で、無意識に倫理に反する行為を行わないためには、結果だけではなく過程を振り返ることや、教職員自身が自己理解を深めることを通して、問題の可能性に気づく能力を高める必要性について学習した。講義の間で他者との意見交換を行うことで、それらの能力を高めていくためには、他者の意見を取り入れていく必要があることについても理解が深まった。



高松大学・高松短期大学からの報告書

研修名：「ティーチング・ポートフォリオ導入と作成」

講師：仲道 雅輝（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 准教授）

参加者：42名（教員42名）

会場：高松大学・高松短期大学2号館1階2105・2106講義室

<概要等>

愛媛大学の仲道雅輝氏を講師に、「ティーチング・ポートフォリオ導入と作成」をテーマに研修を行った。

講師より、到達目標が示され、ティーチング・ポートフォリオの基本構成や作成の流れ等について説明があった。次に、教員が個々に行っている教育活動を付箋に書きだし、グループ分けをして、その理由とエビデンスを加えて、ワークシート上で分類を行った。ワークシートを完成させた後に、各グループでメンターとメンティーに分かれ、メンタリングを行った。

研修終了後には、質疑応答を行い、メンターの人選など、本学でティーチング・ポートフォリオを作成していくに当たり、必要なアドバイスを講師よりいただいた。



静岡県立大学からの報告書

研修名：「学生主体の授業の工夫」

講師：中井 俊樹（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 教授）

参加者：32名（教員32名） / 会場：オンライン

<概要等>

愛媛大学の中井俊樹氏を講師に、「学生主体の授業の工夫」をテーマに研修を行った。

参加者は各研究室からZoomで参加した。

はじめに、発問で学生に思考を刺激することの意義について、楽しい課題を交えて説明をしていただいた。次に、協同学習を進めるうえでのポイントについて説明していただき、ルール作りや「シンク・ペア・シェア」など、新しい知識やスキルを教えていただいた。最後に、経験学習の意義と経験学習を促す発問について学ぶことができた。講演後の質疑応答を通して、さらに理解を深めることができた。

岩国YMC A保健看護専門学校からの報告書

研修名：「学習支援の方法」

講師：上月 翔太（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 講師）

参加者：21名（教員20名、職員1名）

会場：岩国YMC A保健看護専門学校 1階 視聴覚教室

<概要等>

愛媛大学の上月翔太氏を講師に招き、「学習支援の方法」というテーマに研修を行った。4～5人程度のグループで、講義を受けながら、その中で講師からの出された課題について各自ワークを行った後、話し合い、発表した。講義は、「学習支援とは何か」「学習支援の方法」「教育における倫理」という3つの内容で構成されていた。

考えさせられる内容が多く、今まで漠然と行っていた学習支援について、改めて考えることができた。参加した教員からも、「学習支援について悩んだこと、疑問点などをグループで共有できた」「先生の講義を聞くことで、視野が広がった」「学習支援について立ち止まって考えることができた」などの意見を聞いた。経験年数の浅い教員も、長い教員もそれぞれの立場で、自己を振り返る機会にもなった。



山口東京理科大学からの報告書

研修名：「理系の大人数講義における効果的なAL手法」

講師：中井 俊樹（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 教授）

参加者：54名（教員50名、委員3名、学長1名）

会場：山陽小野田市立山口東京理科大学7号館1階 711教室 / オンライン

<概要等>

愛媛大学の中井俊樹教授に「理系の大人数講義における効果的なAL手法」について、FD委員会にて研修をいただいた。

授業設計や問いかけに関する具体的な事例や設問が多く参加した教員も自分事として捉えやすくアンケート結果も好評だった。



国立看護大学校からの報告書

研修名：「教育における倫理」

講師：中井 俊樹（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 教授）

参加者：40名（教員39名、職員1名） / 会場：オンライン

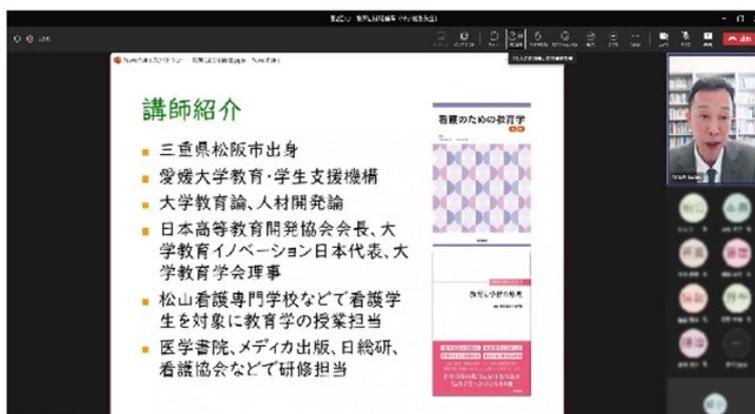
<概要等>

愛媛大学の中井俊樹氏を講師に、「教育における倫理」をテーマにTeamsを用いての研修を行った。

受講者は事前アンケートにより教育における倫理的な課題について考え、講師への質問などを通して準備性を高めて講義に臨んだ。まず講義では、教員に倫理が必要な理由、教員に求められる倫理、教育方法における倫理、学生の問題行動への対応などに関して理論や実例の解説、講師との双方向のやりとりを用いながら学習を深めた。

講義後、職位で振り分けられたグループごとに、教育における倫理的課題についてディスカッションをおこない、グループ内のディスカッション内容を全体で共有した。グループから発表された倫理的な課題について、どのようにすればこの課題に向き合い、解決に向かっていくことができるのか、倫理的な視点や教員としてのあり方について助言を頂いた。

研修終了後には受講者から複数の質問があげられ、講義内容をさらに実践に生かすための意見交換がおこなわれた。



d. 論文・記事の掲載等について

教育企画室のスタッフは、専門分野から大学全体の取組まで、愛媛大学での事例や研究成果を論文や記事にまとめている。今年度は、以下の各種教育誌や新聞等に12本掲載された。また、著書に関しても、共著を含む7冊が新たに出版された。

表題	掲載誌等名	出版社	出版年 /巻/号/頁	著者
カリキュラム改善に活用されるIR	『IDE現代の高等教育』	IDE大学協会	2023年4月、 649号	中井俊樹
オンラインでの疑似体験とピアリフレクションを導入したリーダーシップ教育	『工学教育』	日本工学教育協会	Vol. 71、 No. 4、 pp. 68-73、 2023.	丸山智子ら
大学教育改革の意義を問うー2000年以降の答申における経済的効果の分析ー	『松山大学創立100周年記念 論文集』	松山大学	2023年 /pp. 303-332	真鍋亮
日本における社会科学系教育の効用ー社会科学系学部卒業生の所得に関する分野別比較ー	『松山大学論集』	松山大学	2024年1月	真鍋亮
同一大卒者男子における学業成績と期待生涯賃金の関係性ー学習効率と雇用効率に着目してー	『大学経営政策研究』	東京大学	2024年 第14号	真鍋亮ら
国立大学の情報発信の動向と特徴的な取り組みー「大学概要」を中心にー	『大学教育実践ジャーナル』	愛媛大学教育・学生支援機構	2024年3月 /第23号	坂本規孝
学生企画型学校体験活動を通しての教員志望学生の成長に関するー考察ーわくわくチャレンジサタデー久米での活動をもとにー	『大学教育実践ジャーナル』	愛媛大学教育・学生支援機構	2024年3月 第23号	高橋平徳、 白松賢
大学成績の規定要因に関する実証的研究	『大学入試研究ジャーナル』	大学入試センター	2024年No. 34	真鍋亮
キャラクターで結ぶコミュニティー松大みきゃんの役割と可能性ー	『大学時報』	日本私立大学連盟	2024年3月 第415号	真鍋亮
7つの指針を提案ーマネジメント人材としての係長職	『教育学術新聞』	日本私立大学協会	2023年 7月12日 2931号	坂本規孝

授業科目数の適正化のために（上）	『教育学術新聞』	日本私立大学協会	2023年10月 第2942号	上月翔太
授業科目数の適正化のために（下）	『教育学術新聞』	日本私立大学協会	2023年10月 第2943号	上月翔太

表 題	出版社	出版年	著 者
看護教員のための問題と解説で学ぶ教育設計力トレーニング	医学書院	2023年 6月15日	上月翔太ほか
大学の教務 Q&A 第2版	玉川大学出版部	2023年 8月10日	中井俊樹ほか
第2版 看護現場で使える教育学の理論と技法	メディカ出版	2023年 9月1日	中井俊樹、 上月翔太ほか
学習成果の評価	玉川大学出版部	2023年 10月20日	上月翔太、 中井俊樹ほか
多文化ファシリテーター多様性を活かして学び合う教育実践	明石書店	2023年 11月10日	中井俊樹ほか
看護教員のための問題と解説で学ぶ教育指導力トレーニング	医学書院	2023年 12月1日	上月翔太ほか
仕事につながる学生時代の学びに関する実証的研究	松山大学	2024年 3月1日	真鍋亮ほか

Ⅲ. FD/SD活動を行う大学間連携ネットワーク等との協働

a. 他拠点等との協働による研修会の実施

芝浦工業大学教育イノベーション推進センター（理工学教育共同利用拠点）との共催で、ファカルティ・ディベロッパー養成講座とカリキュラム・コーディネーター養成講座（9月20日～22日）を開催した。また、IRer養成講座（12月14日～15日）を昨年度に引き続き、名古屋大学高等教育研究センター（質保証を担う中核教職員能力開発拠点）と共催した。他拠点との継続的な協働において、内容のブラッシュアップを行い、質の高い研修を提供することができた。

さらに、今年度は、高知大学との共催で教務事務担当者講座（初級編）（11月16日～17日）を実施したほか、大学教務実践研究会と連携して大学教育国際化コーディネーター養成講座（5月19日～20日）を開催するなど、他機関との連携を深めた。両研修において、大学教務実践研究会の構成員を講師に迎えたことにより、受講者からも、関係法令や他大学の事例を知ることができ、基礎的な知識を身に付けることができたとの声が上がっていた。

次年度以降も引き続き、他拠点等と連携して研修を実施する予定である。

b. 他ネットワーク等への講師派遣・運営支援

日本高等教育開発協会（JAED）主催「ファカルティ・ディベロッパー養成研修会＜初級編＞＜中級編＞」（11月24日～25日）、「学習支援コーディネーター養成研修会」（12月9日～10日）、「カリキュラム・コーディネーター養成研修会＜評価編＞」（12月23日～24日）、公益財団法人大学コンソーシアム京都主催「IRフォーラム」（8月26日）、お茶の水女子大学コンピテンシー育成開発研究所主催「第1回オンラインセミナーコンピテンシーを育成するアクティブラーニング」（3月7日）など、他ネットワーク等へ本拠点から講師の派遣を行った。

本拠点代表の中井は、現在、日本高等教育開発協会（JAED）の会長を務めている。また、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）の企画・実施統括者を務めるなど、FD・SDともに、本拠点から多数の講師派遣を行うだけでなく、運営支援にも深く携わっている。なお、大学教育イノベーション日本（HEIJ）において、10月から新たに本学が事務局を担当することとなった。

これらのネットワーク等との連携を活かし、大学教育の開発に積極的に取り組み、支援の対象を全国の高等教育機関へと広げている。

参加により期待できる変化

- 大学における学習支援の指針や方法について説明できるようになり、組織的な視点から問題を見つけその解決策や改善について提案することができるようになります。
- 所属大学の学生の状況やニーズ、実施されている学習支援の特徴と課題を整理し、他部署と連携した学習支援を提案できるようになります。
- 所属大学で実施する学習支援を向上させるためのアクションプランを作成できるようになります。
- 学習支援担当者のネットワークが広がります。

本研修会の到達目標

- (1) 学習支援とその意義を説明できる
- (2) 学習支援のさまざまな方法を説明できる
- (3) 所属大学における学習支援の現状を把握し、組織的な視点から問題の解決方法を提案できる
- (4) 学習支援に関わる多様な考え方や実践事例を通じて、共に学び合う雰囲気貢献する

参加申し込み

お申込み

問合せ
メールアドレス

参加費

振込先

<https://www.jaedweb.org/dev1>

info@jaedweb.org

1人 20,000円

三井住友銀行 兵庫支店 普通 7758395 かんぽのつぎぎ「ぎんこう」



<参加費内訳> テキスト※/当日資料印刷・製本費 // 当日研修費用/昼食
※清水栄子・中井俊樹編(2022)『大学の学習支援 Q&A』
(玉川大学出版部)を参加者に配布いたします。



日本高等教育開発協会 (JAED)

Web: <https://www.jaedweb.org> お問い合わせ先: info@jaedweb.org

第2回

学習支援コーディネーター 養成研修会

受講証
発行

～ 組織的な学習支援の取り組みや改善の方法を考える ～

各大学では教育目標を達成するために、個々の学生のニーズや課題に対応する組織的な学習支援に取り組み、継続的に改善を図ることが必要とされています。本研修会では貴学における組織的な学習支援を担う学習支援コーディネーターの養成を目指します。

- 開催日程 2023年12月 9日土曜日 10:00 から 17:15まで
2023年12月10日日曜日 10:00 から 17:15まで 定員 30名
- 場所 追手門学院大学総持寺キャンパス
大阪府茨木市太田東芝町 1-1
- 対象者 大学教職員

事前課題があります。
詳しくは内面をご参照下さい。
研修会全日程を受講の方に受講証を発行します。

【主催】日本高等教育開発協会
【共催】追手門学院大学教育支援センター
愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室（教職員能力開発拠点）
株式会社学ひと成長しくみデザイン研究所

多様な学生を受け入れている大学では、学習者本位の教育の提供とともに、その質の保証が求められています。学生の学びを充実させるためには、正課教育だけでなく、正課外活動も視野に入れたきめ細やかな支援が必要とされています。そのためには、授業を担当する教員とともに職員も参画した組織的・戦略的な学習支援の重要性が高まっています。そこで、組織的な学習支援の企画・運営に携わる人材である学習支援コーディネーターが必要とされています。

本研修会では、学習支援コーディネーターとして求められる学習支援に関する理論と実践を学び、所属大学での組織的な学習支援を推進するための具体的なアクションプランの作成を行います。講義だけでなく、参加者同士の議論や講師とのメンタリングを通して学ぶことで理解を深めていきます。

学生のニーズに沿った支援方法の検討、協働体制の構築といった学習支援に関する課題の遂行や学習支援の組織的な運営を担うみなさまのお申し込みをお待ちしております。

このような方が対象です

- 学習支援による教育効果を高めたいと考えている教職員
- 所属大学の学習支援を改善したいと考えている教職員
- 学習支援の組織的運営に携わる管理職

事前課題

テキスト『大学の学習支援Q&A』を踏まえ、以下の課題についてワークシートの指定の箇所に記載してください。

- 1) 所属大学で提供されている組織的な学習支援の名称と支援の概要について可能な限り調査し記載してください。
- 2) 所属大学の学習支援について改善したいと考えていることを記載してください。

講師



中井俊樹
日本高等教育開発協会
会長
麗耀大学
教授



清水栄子
追手門学院大学
准教授



上月翔太
麗耀大学
講師



多田翠純
京都橋大学
専任講師

プログラム

研修1日目 ◇ 12月9日土曜日

<オープニング> 10:00~10:20

オリエンテーション・参加者自己紹介

2日間の研修に関するオリエンテーションおよび参加者による自己紹介を行います。
10:20~11:30

学習支援とその意義

中井俊樹

大学の学習支援とはどのような活動でしょうか。具体的に大学のどのような問題を解決するものでしょうか。所属する大学の文脈でどのように学習支援を位置づけて、どのように組織的に実施することができるのかを考えます。

ランチタイム <11:30-12:30>

12:30~13:30

面談の指針と体制

清水栄子

学習上の問題は個々の学生によって異なることを考えると、学生一人ひとりの状況に応じた支援ができる面談は、基本的な学習支援の方法といえます。面談の指針、標準的な5段階の方法について学び、組織的な学習支援の体制について検討します。

13:40~14:40

多様な学生への支援

上月翔太

多様な学生の支援は学習支援の重要な役割の1つです。学生の多様性には様々な観点があり、学習支援に携わる教職員には一定の知見が求められます。ここでは学習支援において、学生の多様性をどのように理解すべきか、組織的な支援において何に留意すべきかを学びます。

14:50~15:50

学生相互による支援

多田翠純

学生相互による学習支援には、支援を受ける学生と支援を行う学生の双方に学びと成長の機会を提供できます。一方で、効果的な支援を展開するためには、支援を行う学生との関係構築や研修の実施など、留意すべき点もあります。ここでは、学生相互による学習支援の意義と方法について学びます。

<全体> 16:00~17:00

学習支援の実践共有 (全体協議)

全講師

学習支援を実践するうえで工夫や困っていることを共有し参加者間で意見交換を行います。

17:00~17:30

情報交流会 (名刺交換)

研修2日目 ◇ 12月10日日曜日

10:00~10:10

前日の振り返り

1日目に学習したことを振り返り、より効果的に2日目の学習に繋がります。

10:10~11:10

専門組織の運営

清水栄子

効果的かつ効率的に学習支援を推進するために、学習支援の専門組織はどのように運営されるのがよいのでしょうか。この問いについて、専門組織の目標設定、評価、広報、構成員の能力開発などの観点から考えます。構成員個人でできることや組織全体ですべきことについても検討します。

<個人ワーク> 11:20~11:50

所属大学における学習支援の現状把握

組織的な視点から所属大学における学習支援の運営や実践を振り返り、現状と改善点を検討します。

ランチタイム <11:50-12:50>

<個人ワーク/講師とのメンタリング> 12:50~15:20

所属大学の学習支援を改善するための行動計画作成

全講師

所属大学の学習支援を改善するためのアクションプランを作成します。講師とのメンタリングを行い、ブラッシュアップします。

<全体> 15:30~17:00

行動計画の発表・相互フィードバック

全講師

作成したアクションプランを参加者と共有し、いつまでにどのような行動を起こすのかを宣言します。

<クロージング> 17:00~17:15

よりよい学習支援を展開するために (全体のふりかえり)

2日間の全体のふりかえりと研修のまとめを行います。

2023年度

第1回 オンラインセミナー コンピテンシーを育成する アクティブラーニング

参加
無料



LECTURER

中井俊樹先生

愛媛大学

教育・学生支援機構 教授

専門は高等教育論および人材育成論。愛媛大学の教育の企画、評価およびFD、SDの企画、実施に加え、教職員能力開発拠点の活動として他機関における研修や組織開発支援を担当。大学教育、大学教員、大学の管理運営、看護教育などのテーマのご著書多数。『シリーズ大学教育の質保証② 学習成果の評価』（シリーズ編著、玉川大学出版部、2023年）、『看護現場で使える教育学の理論と技法 第2版』（編著、メディカ出版、2023年）などがある。



『シリーズ大学の教授法3
アクティブラーニング』
(編著、玉川大学出版部、2015年)

今年度のオンラインセミナーは、
高等教育論及び人材育成論をご専門とし
「アクティブラーニング」のご著書のある愛媛大学教授の中井俊樹先生に、
コンピテンシー育成に資するアクティブラーニングの
効果的な取り入れ方についてご講演をいただきます。

開催
日時

2024年3月7日(木)

13:30~15:00

Zoomによるオンラインセミナー(一般公開)

対象

教育関係者、一般

講演者

愛媛大学 中井俊樹教授

主催

お茶の水女子大学コンピテンシー育成開発研究所



TIME TABLE

※本セミナーは録画され、後日学内公開されます。

13:30~13:35

開会挨拶

◎ コンピテンシー育成開発研究所 所長 坂元章

13:35~13:50

本学における取り組み

◎ コンピテンシー育成開発研究所 特任助教 押尾恵吾

13:50~14:35

講演「コンピテンシーを育成するアクティブラーニング」

◎ 愛媛大学 教育・学生支援機構 教授 中井俊樹

14:35~14:55

質疑応答・討論

14:55~15:00

閉会挨拶



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

お茶の水女子大学は2022年4月にコンピテンシー育成開発研究所を設立いたしました。コンピテンシーとは、批判的思考力、協働性、創造性、問題解決力、自己制御力など、社会的な場において成果を上げる資質・能力です。本研究所では授業におけるコンピテンシー育成の1つの方法として、アクティブラーニングの導入を推進しております。

要事前登録

オンラインセミナーの参加申し込みはこちら

※事前登録は3/6まで



パソコン

<https://forms.gle/hFegbwtiqvsVmkbX6>

スマホ



お問い合わせ：お茶の水女子大学コンピテンシー育成開発研究所 e-mail: icd-info@cc.ocha.ac.jp

転載許諾済 2024.3.14

愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室内規

平成18年5月10日
制 定

(設置)

第1条 愛媛大学教育・学生支援機構規則第10条第2項の規定に基づき、愛媛大学教育・学生支援機構（以下「機構」という。）に愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室（以下「教育企画室」という。）を置く。

(目的)

第2条 教育企画室は、愛媛大学教育・学生支援機構長（以下「機構長」という。）の指示のもと、愛媛大学（以下「本学」という。）の教育に関する諸課題について調査、研究等を行うとともに、その成果を実際の教育活動に適用し、本学の教育改革を推進することを目的とする。

(教育研究部門)

第3条 前条の目的を達成するため、教育企画室に次の各号に掲げる教育研究部門（以下「部門」という。）を置く。

- (1) 教育・学習支援部門
- (2) 教育調査・分析部門
- (3) 学生能力開発部門

(業務)

第4条 教育企画室は、機構長の指示に基づき、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 全学的な教育課題に係る調査、研究等に関すること。
- (2) 教育の質保証のための教職員の能力開発に関すること。
- (3) 授業評価及びシラバスに関すること。
- (4) 学生の学習支援及び能力開発に関すること。
- (5) 四国地区大学教職員能力開発ネットワーク事業に関すること。
- (6) 教職員能力開発拠点事業に関すること。
- (7) その他教育開発に係る調査、研究等に関すること。

(組織)

第5条 教育企画室に、次の各号に掲げる職員を置く。

- (1) 室長
- (2) 副室長
- (3) 室員

- ア 教育企画室に配属された機構の専任教員
イ 機構の専任教員（アを除く。） 若干人
ウ 本学（機構を除く。）の専任教員 若干人

- 2 室長は、機構長が指名する副機構長をもって充てる。
- 3 副室長は、本学の専任教員のうちから、機構長がその者が所属する学部等の長の同意を得て、委嘱する。
- 4 室員のうちイの者は機構長が指名し、ウの者は機構長がその者が所属する学部等の長の同意を得て、委嘱する。
- 5 副室長及び室員（アを除く。）の任期は1年とし、再任を妨げない。

(職務)

第6条 室長は、教育企画室の業務を掌理する。

- 2 副室長は、室長の職務を助ける。

3 室員は、教育企画室の業務を処理する。

(共同利用運営委員会)

第7条 教育企画室に、第10条に規定する共同利用の実施に関する重要な事項を審議するため、共同利用運営委員会を置く。

2 共同利用運営委員会に関し必要な事項は、別に定める。

(研究員)

第8条 教育企画室に、研究員を置くことができる。

2 研究員は、教育企画室の業務に従事する。

3 研究員は、本学の職員のうちから、室長が推薦し、機構長が当該職員の所属する学部等の長の同意を得て、委嘱する。

(教育支援員)

第9条 教育企画室に、教育支援員を置くことができる。

2 教育支援員は、教育企画室の業務に参画する。

3 教育支援員は、他の大学、地方公共団体、民間企業等（以下「他の大学等」という。）の者の中から、室長が推薦し、機構長がその者が所属する他の大学等の長の承認を得て、委嘱する。

(共同利用)

第10条 教育企画室は、教職員の能力開発のため、本学の教育、研究に支障のない範囲で、本学のプログラム、設備、資料等を、他の高等教育機関等の利用に供することができる。

(事務)

第11条 教育企画室に関する事務は、教育学生支援部において処理する。

(雑則)

第12条 この内規に定めるもののほか、教育企画室に関し必要な事項は、機構長が別に定める。

附 則

この内規は、平成18年5月10日から施行し、平成18年4月1日から適用する。

附 則

この内規は、平成20年4月23日から施行し、平成20年4月1日から適用する。

附 則

この内規は、平成21年4月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成22年3月23日から施行する。

附 則

この内規は、平成24年9月19日から施行する。

愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室共同利用運営委員会内規

平成22年3月23日
制 定

(趣旨)

第1条 この内規は、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室内規(以下「教育企画室内規」という。)

第7条第2項の規定に基づき、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室共同利用運営委員会(以下「運営委員会」という。)の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、教育企画室内規第10条に規定する共同利用の実施に関する重要な事項を審議する。

(組織)

第3条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 教育企画室長
- (2) 教育・学生支援機構の専任教員 1人
- (3) 教育学生支援部長
- (4) 学外の学識経験者 若干人

2 前項第2号の委員は、教育企画室長が推薦し、愛媛大学教育・学生支援機構長(以下「機構長」という。)が指名する。

3 第1項第4号の委員は、機構長が推薦し、学長が委嘱する。

4 第1項第2号及び第4号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じたときはこれを補充し、その任期は、前任者の残任期間とする。

5 第1項第1号から第3号までの委員の合計数は、運営委員会の委員の総数の2分の1以下とする。

(委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、機構長が指名する。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

(議事)

第5条 運営委員会は、委員(代理者を含む。以下同じ。)の過半数が出席しなければ議事を開くことができない。

2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員長が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、説明又は意見を聴くことができる。

(事務)

第7条 運営委員会に関する事務は、教育学生支援部において処理する。

(雑則)

第8条 この内規に定めるもののほか、運営委員会の運営に関し必要な事項は、運営委員会が別に定める。

附 則

1 この内規は、平成22年3月23日から施行する。

2 この内規施行後、最初に任命される第3条第1項第3号及び第6号の委員の任期は、同条第4項の規定にかかわらず、平成24年3月31日までとする。

附 則

この内規は、平成23年5月9日から施行する。

附 則

この内規は、平成27年4月1日から施行する。

附 則

この内規は、令和4年4月19日から施行し、令和4年4月1日から適用する。

愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室共同利用推進会議内規

平成22年 4月21日
制 定

(設置)

第1条 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室内規第12条の規定に基づき、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室に愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室共同利用推進会議（以下「共同利用推進会議」という。）を置く。

(目的)

第2条 共同利用推進会議は、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室共同利用運営委員会が定める基本方針に基づき、共同利用の事業等を実施するために必要な事項を審議する。

(組織)

第3条 共同利用推進会議は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 教育企画室長
- (2) 教育企画室副室長
- (3) 教育・学生支援機構の専任教員 1人
- (4) 教育学生支援部長
- (5) 教育企画課長
- (6) 人事課長

2 前項第3号の委員は、教育企画室長が推薦し、愛媛大学教育・学生支援機構長（以下「機構長」という。）が指名する。

(議長)

第4条 共同利用推進会議に議長を置き、機構長が指名する。

- 2 議長は、共同利用推進会議を招集し、主宰する。
- 3 議長に事故があるときは、議長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

(議事)

第5条 共同利用推進会議は、委員の3分の2以上の出席がなければ議事を開くことができない。

- 2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可決同数のときは議長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第6条 議長が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、説明又は意見を聴くことができる。

(事務)

第7条 共同利用推進会議に関する事務は、教育学生支援部教育企画課において処理する。

(雑則)

第8条 この内規に定めるもののほか、共同利用推進会議の運営に関し必要な事項は、共同利用推進会議が別に定める。

附 則

この内規は、平成22年4月21日から施行する。

附 則

この内規は、平成23年5月9日から施行する。

附 則

この内規は、平成24年5月15日から施行する。

附 則

この内規は、令和4年4月19日から施行し、令和4年4月1日から適用する。

愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室

共同利用運営委員会委員名簿

氏名	所属・職名	備考
杉森 正敏	愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室長、教授	第1号委員
中井 俊樹	愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 教授	第2号委員
桐野 律子	愛媛大学教育学生支援部長	第3号委員
榊原 暢久	芝浦工業大学教育イノベーション推進センター 教授	第4号委員
丸山 和昭	名古屋大学大学院教育発達科学研究科 准教授	第4号委員
竹山 優子	筑紫女学園大学教学支援部 企画主幹	第4号委員
小林 功英	日本私立大学協会広報部企画課長	第4号委員

共同利用推進会議委員名簿

氏名	所属・職名	備考
杉森 正敏	愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室長、教授	第1号委員
仲道 雅輝	愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室副室長、准教授	第2号委員
中井 俊樹	愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 教授	第3号委員
桐野 律子	愛媛大学教育学生支援部長	第4号委員
高木佳代子	愛媛大学教育学生支援部教育企画課長	第5号委員
久保 秀二	愛媛大学総務部次長	第6号委員



令和6年3月 発行

発行 教職員能力開発拠点
(愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室)
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番
TEL.089-927-8922
E-mail opar@stu.ehime-u.ac.jp
<http://web.opar.ehime-u.ac.jp/>